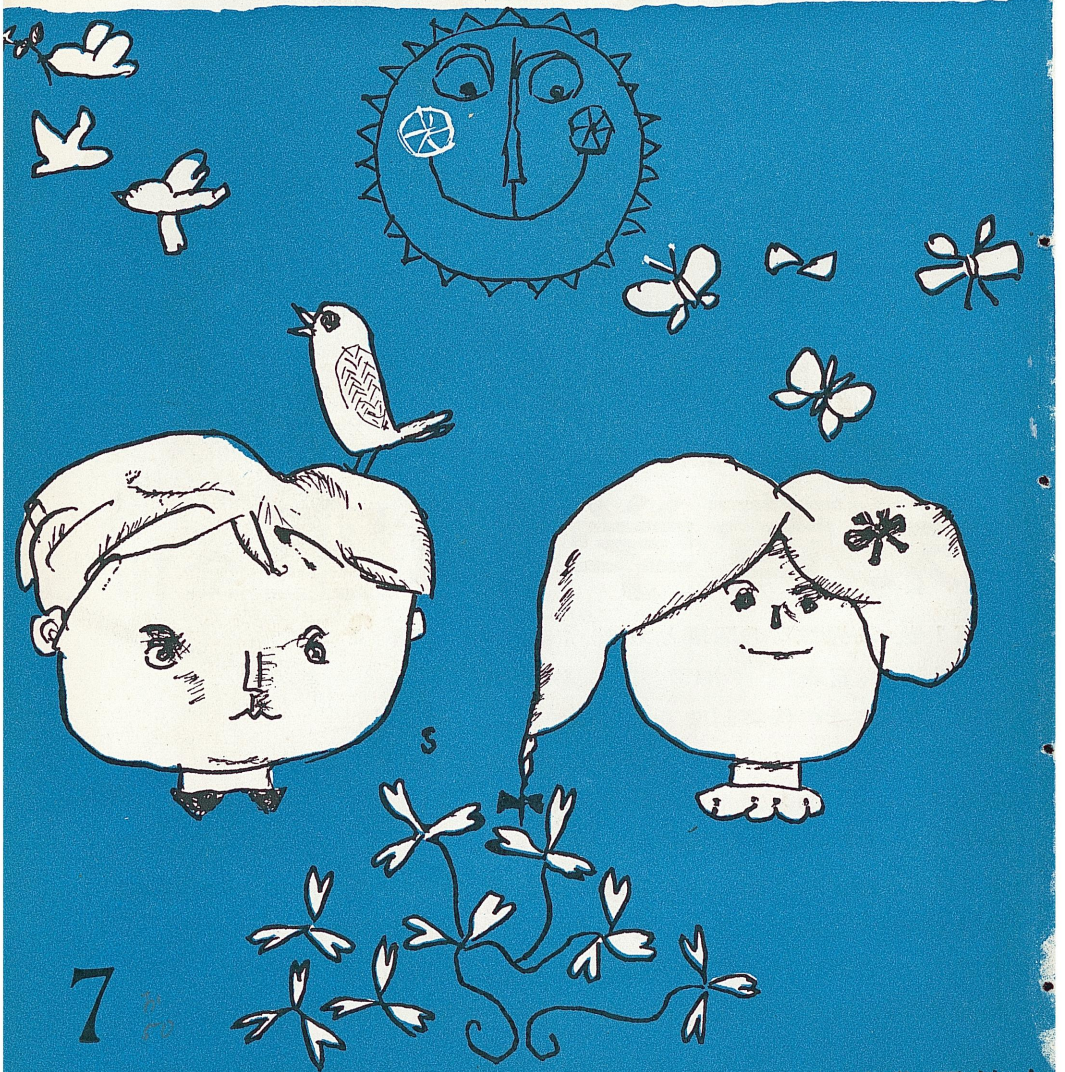


家庭・保育所・幼稚園

N24
69(2)
4

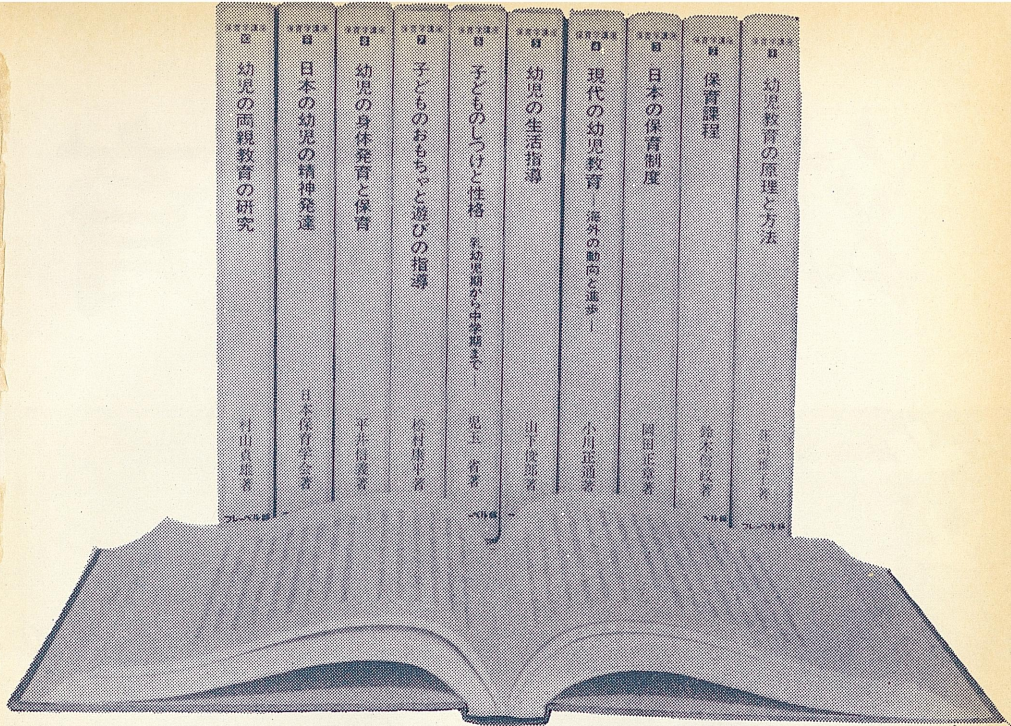
幼児の教育

第六十九卷 第七号



7

日本幼稚園協会



保育の原点をさぐる全10巻！

日本保育学会監修

日本保育学会発足20周年記念出版

保育学講座 全10巻

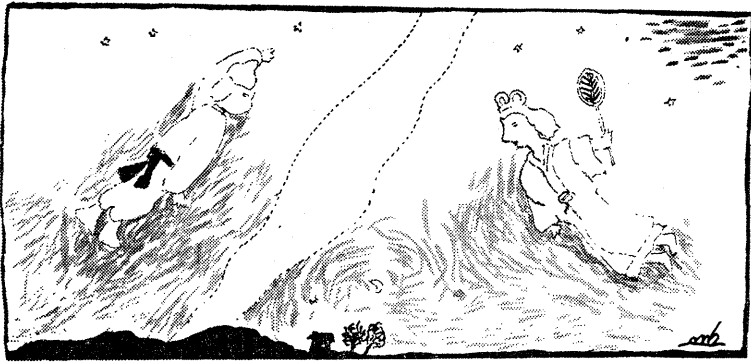
- 第1巻・幼児教育の原理と方法 広島大学教授 荘司雅子著 既刊
- 第2巻・保育課程 愛知教育大学教授 鈴木信政著 既刊
- 第3巻・日本の保育制度 明星大学教授 岡田正章著 既刊
- 第4巻・現代の幼児教育—海外の動向と進歩— 大阪市立大学教授 小川正通著 既刊
- 第5巻・幼児の生活指導 東京家政大学教授 山下俊郎著 近刊
- 第6巻・子どものしつけと性格—乳幼児期から中学期まで— 日本女子大学名誉教授 児玉 省著 既刊
- 第7巻・子どものおもちゃと遊びの指導 お茶の水女子大学教授 松村康平著 既刊
- 第8巻・幼児の身体発育と保育 お茶の水女子大学教授 平井信義著 既刊
- 第9巻・日本の幼児の精神発達 日本保育学会著 近刊
- 第10巻・幼児の両親教育の研究 日本女子大学教授 村山貞雄著 既刊

A5判・上製本ケースつき 定価・各巻1,200円 全巻予約特価各1,000円

もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください。

発行・株式会社

フレーベル館



幼児の教育 目次

——第六十九卷 七月号——

表紙 鈴木義治

幼児の中であって生きること……………津守 真…(2)

幼稚園期の絵にみる成長……………林 健造…(4)

手先の動きと子どもの感情③……………清水 エミ子…(10)

サンド・ブレイ・テクニク(箱庭療法)について③……………秋山 達子…(18)

★ヨーロッパの旅④……………平井 信義…(27)

北欧保育短信⑤……………飯田 泰造…(32)

★問題行動の研究③……………児玉 省…(36)

保育の中の絵本……………森 緑…(47)

子どもの発案によるあそび(1)……………田中 都慈子…(54)

子どもに見る男女の性分化とテレビ……………室谷 幸吉…(58)

ハンガリーの保育園の(教材うた)……………加勢 るり子…(64)

マリア・モンテッソリの町グリフォーネをたずねて……………西本 美節…(66)

一点の厳粛味……………倉橋惣三選集より…(72)

幼児の中にあつて生きることに



津 守 真

最近、私は一連の幼児の絵をみていて気がついたことがある。その子どもは、五歳の後半になったころから、家の絵をよく描き、その家にはドアが描かれている。そしてそのそばに女の子が描かれる。このような絵が半年くらいの間に数多くかかれていますのである。

はじめのうちは、一枚の画面の上の家と女の子は相互に関連のない絵かと思っていたが、子どもと会話をかわしたり、その子の絵を何枚も見ているうちに気がついたことは、それは女の子が家から外に出かけていくことを描いているということである。家といっしょにかならず描かれるドアは、それを開いて外に出ていくという行為を示すものである。そして女の子は自分自身と考えてまず間違いがなさそうである。

この子どもは五歳になってから急に活発になり、友だちともよく遊ぶようになり、絵にあらわれているように外の世界に興味を

示している。そして、生活のいろいろの面で外向きの姿勢がみられるようになっていく。

私はこの一連の絵をみていて、絵に子どもの生活や態度があらわれるという意味でもしろいというのみでなく、子どもは絵をかくときにまで、自分が生きていく生き方に関心を示し、そのことに打ちこんでいるのを知って心打たれた。

幼稚園は子どもの教育の場であるというが、いったい教育の場というのはどういうことであろうか。おとなが子どもをいずれかの方向にひっぱっていかうと努力する場と考えてよいであろうか。そのような面はある。先生はそのクラスの子どもたちのことにいっしょけんめいになるし、先生自身は理想や目標を高く掲げていることはたいせつなことである。しかし、それより以前に、子ども自身、生きることを求めている。幼稚園は、子ども自

身が自らの生き方を求めて努力している場である。その努力というのとはおとなのように局限された意味ではないし、その求め方はことばや文字や観念的な思想によるものではない。もっと体ごとのことである。そのような子ども自身の努力を前提としてはじめて教育の場は成り立つのである。

幼稚園で子どもが口をきかなかったり、乱暴をしたり、いうことをきかなかったり、けんかをしたり、その他おとなにとって不可解とみえる行動をするのは、子どもが自らの生き方を求めているからともいえる。子どもは、自分がどうしたらよいのかを、子どもなりにさがし求めている。自分自身の生き方を求めているということにおいて、幼児も教師も共通である。

幼稚園の教師が子どもの中ではたらくということは、自分自身、人間としての生き方やあり方を求めていることが前提となっている。おとなとしての教師は自分の頭の中だからまわりすることが多い。しかし教師として子どもの中にあるときには、子どもという対象があり、相手があるから、自分のあり方をきめるのはより容易である。相手である子どもによりよく振舞うことができようということが明瞭な課題になるからである。

教師ということばは、児童や生徒に対する公的な役割を示す語である。一体、幼稚園の先生が、幼児の中における自分自身のこ

とを意識するときに、教師ということばで意識するとしたら、何かたいせつなものが落ちてしまうのではないだろうか。「せんせい」は、子どもと社会的な身分の違いを前提として振舞うのではなく、人間として共通な部分によって相互に理解しあうのである。幼児と教師は、それぞれ、人間として生き方を求めている人間と人間である。そこで教師は、相手の人間がよりよく生きることができるようということ、自分自身の課題として真剣にとりくむ人間でなければならない。

幼稚園の中には、根本から問題を問い直して考えていかねばならぬ問題がたくさんある。子どもがそんなに真剣にはじめての新しい人生を進もうとしているときに、おとなもまた真剣に、そこで問われている課題にとりくまねばならないと思う。幼児の生活環境のこと、教育の内容のことなどもある。音楽のように、教育の内容であるとともに養成機関の大きな問題であるものもある。職員間の人間関係や組織のように、目にみえないが重大な力をもつ問題もある。教育という語がよいのか、保育という語がよいのか、ほとんど同じものを指しながら、都合によっていろいろに使用されることばの問題もある。またその中であって、幼児に関する学問はどのようであつたらよいのか、私自身、最も関心のある課題である。

幼稚園期の絵にみる成長

林 健 造

一、シンボルを使う動物

人がサルその他の動物と異った特色をもっていることの中で、一つは「シンボル化作用」をもっていることが挙げられよう。

言語というものはまさにそういうものであるが、ここで述べようとする絵もまた、きわめて言語の体系とよく似ている、形象化されたシンボルである。

ハトは平和のシンボルであるが、ハトの絵はハトのもつ意味を表わしている点で一つのシンボルである。

ホールデン (Holdane, J. B. S.) は、「たんなる感情・情緒の表出や、すぐまじかの将来のできごとだけでなく、少し前、または遠い過去のできごとについても叙述することができる」という

ことで人の言語の特色を述べているが、人は同じく絵によってもそのことを述べることができる。

幼児期の絵かき行動は、言語や文字表現の未発達にともない、多分に言語の代用を果たしているという見方ができる。

従来、この幼児の絵かき行動を、「絵画」としてとらえようとする傾向が強く、したがって、絵画という概念のステレオタイプが、まず美を優先させ、構図法や色彩の調和などを尺度として幼児画をみていたことに墮^だしていたと思われる。

幼児の絵は、「ぼくのみた象さんって、耳がこんなに大きくてね」などということを描いて、ママとか先生とかに知らせようということなのであるから、一つの言語伝達とよく似た働きであり、ここでは、美よりもむしろ真の方が優先されなければならない

い。

ともあれ幼児はこのように色や形のシンボルを使って、自分を説明し、次第に自分を深めていく。

二、なぐりがきからの発展

深めていく過程に、いくつかの段階を通過する、これがいわゆる発達段階であるが、はつきりさせておきたいことは次の点である。

- 1、特定の年齢と結びついたものでない。
- 2、個体差があること。
- 3、進み方が、ある段階では早く、ある段階ではゆっくりしたり、一時あともどりをしたりすること。
- 4、ある段階をとびこしては進まないこと。

等で、いわゆる竹の節のように一直線に続くものではない。

幼児の絵かき行動は、およそ満一歳前後から始まる。いわゆるスクリブル（なぐりがき）という、たよりないたての線やよこの線がかかれ、やがて円形のものもこれに加わる。これは、人の手指関節の運動しやすい方向と大きなかわりを持つ。即ち、よこ線は左から右、たて線は上から下、小さな円は内旋円（時計の針と逆方向）、大円は外旋円となる傾向が多い。

このようななぐりがきは、一歳—二歳頃といわれているが、三歳でも、四歳でも情緒不安定な場合などしばしば表われる。前述のような一時的後もどり現象である。このなぐりがきを出発点として、いわゆる絵的なものに次第に発展していく過程について最もすぐれた研究を発表しているのは、サンフランシスコのゴルドン・ゲート保育学校のローダ・ケログ（Killogg, Rhoda）である。

ケログ（注1）は、絵画表現の基本的段階を次のとおり認めている。

一、なぐりがき

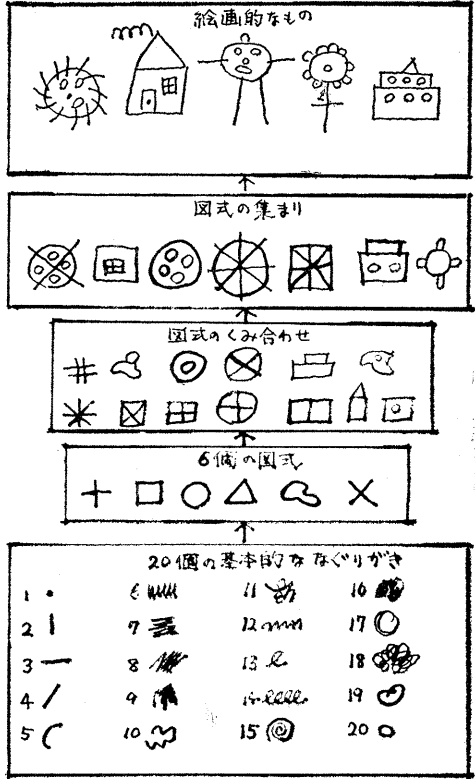
二、図式

三、図式の組み合わせ

四、図式の集まり

五、絵画的なもの

ケログはまずなぐりがきの基本型を20にまとめ、（点・垂直線・水平線・単一ループ線・不完全円等）、これらが蒸留と単純化の過程をへて次の六つの基本図式になる。（正十字形・正方形・円形・三角形・異常形・斜め十字形）。これらの図式が、はつきりと十字形や円が確立されるところを組み合わせる新しい形を創造する。かくして「図式の集まり」的段階になるわけである。



これはまだきわめて抽象的であるが、重要な意味をもつ段階である。というのは最も初期の画像の先駆になるからである。これを

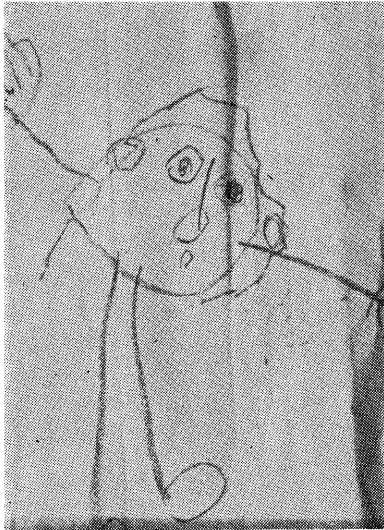
「絵画的なもの」という欄で示している。

世界中の子どもは、このような図式の集まりから、ゆっくりりとはあるが確実に絵画的なものへと成長する。(註1「美術の発

生」デスモンド・モリス著 小野嘉明訳)

三、三歳児の絵の特色

写真①は三歳児が描いた「ママ」である。



写真①「ママ」三歳児

これが、まったく偶然ではあるが、前述のケロッグの「絵画的なもの」の人物とそっくりなのに驚く。このような人物表現は「頭足人」と呼ばれている典型的な型である。

自分のママを表現するのに、イメージは顔中心である。ママとは最も接触の多い、顔だけがイメージに強くなりつついていて、腹部や腕の関係位置の認識は漠として

いるからでもある。ケロッグふうにいえば、円と直線の組み合わせで描いている。またお茶の水女子大学にも交換教授で来たことのあるゲシュタルト心理学者のアルムハイム教授は「幼

児はやがて円の描き方を獲得すると、すべてのものを円を使って表現しようとする」ことを話してい

たが、この時代は、まさに円表現獲得の時期であり、多方面への活用の時期でもあることが解る。

一般的には次のような特徴があげられる。

- a ながりがきでも、さかんに言葉で意味づけをする。
- b ほとんどの子が「象徴期」といわれる時期に入り、人とか動物とか太陽などが散漫に画面の中にかかれ、いかにもカタログみたいなので、一名カタログ期といわれる時期である。
- c 人物は頭足人型が多い。
- d 興味の中心は特に大きくかく。

四、四歳児の絵の特色

写真②は、四歳児のかいた「ねこ」の絵である。

「ねこってね、すごいよ。毛がこうなってるね、おひげもあるの」などというびくびくした幼児らしい感動が、生き生きと水彩絵の具で表現されている。

大分三歳児とは違ったとらえ方、かき方をしている。

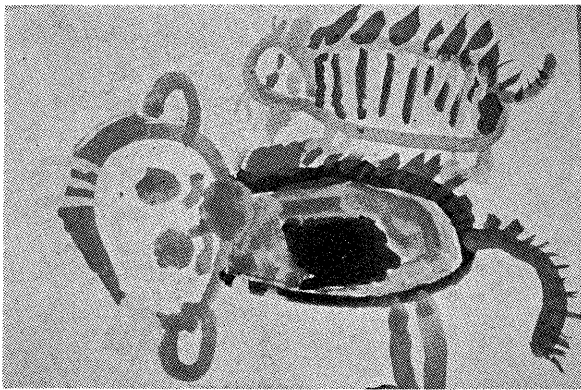
おそらくは、教師が園に猫をつれてきて、さわらせたり、食べものをやったりして、幼児と遊ばせながら観察させてかかせたものであろう。

頭と胴、耳や尾や脚などが大分関係的にとらえられているし、

胴などは、形の線の中を色やしまの線で埋めている。

それでも十分観察したにもかかわらず、猫の顔は人間同様の鼻がかかれています、きわめてユーモラスである。このことを、アニミズム的表現と呼んでいる。これがまた奇妙にかく子と似ているものである。

手前の猫の前肢は、かかれていないのではなく、白の絵の具で描いたために写真ではよくみえていないのである。



写真②「ねこ」四歳児

- うしろの猫も、手前の猫も、背中のお尻が立っているのは、猫がおこった時のシヨッキングな印象が、強くやきついていたのであろう。
- 一般的に四歳児の絵の特色は、
 - a 外界の事象をかくようにな
 - b 興味や関心の

強いところを誇張してかく。(そのために、みえない部分をかくレントゲン描法などが生まれる)

c 未分化であるので、空想的な表現が多く、お話の絵などを喜んでかく。

d 人物も、頭、胴、手、脚などの関係が一応表現できる。

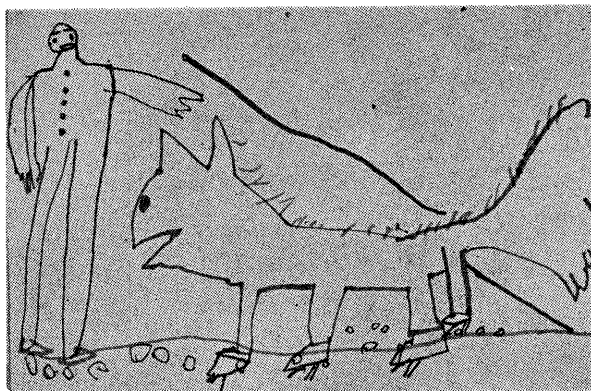
★レントゲン描法

特にレントゲン描法について註釈を加わしておくが、レントゲン描法というのは、ねている布団の中に人の体をかいたり、遠足のリュックサックの中にバナナを描いたりする絵の俗称で、本当は子どもがそう見えるのではなく、三次元の世界を二次元の画用紙に表現するときいかに表現すべきかを苦慮した上で、発見した方法なのである。バナナの絵とリュックサックの絵とを二枚描いて合わせたとみる方がわかりやすい。(これを製作やねんどで作らせると容易にレントゲン画の正体が解る)

五、五歳児の絵の特色

写真③は、「犬と遊んでいるぼく」という絵である。これは日本独特の描画材料割ばしとすみを使ってかいている。

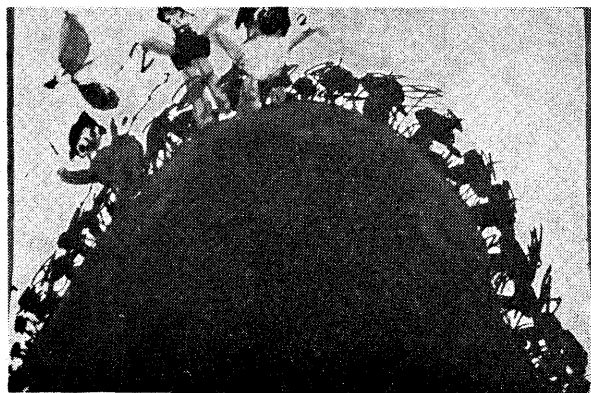
自分の家に大きな犬がいて、ぼくと仲よしなんだということをかいているのだろう。



写真③「犬とぼく」五歳児

の線の上に花・人・家などを横に並列してかくといった型が一番多い。アメリカのローウェンフェルド博士によれば、「これは社会性が育ったということである」という。単純にものをとらえていたことから、ものとの関係が解ってきたという成長のしるしといえよう。また同様に、画面の上には、線状に青色を塗り、隅に太陽を必ずかくといった型も、この基底線と並行してでてくるが、これは高いところは空だということを表わしている。よ

ここで注目しなければならないのは、画面の下に一本の横線がひかれていることである。この線は地面を表わしている。いわゆる基底線と呼ばれるものである。五歳児の絵の大きな特徴は、この基底線が描かれるようになるといことである。しばしばこ



写真④「遠足」五歳児

く指導者が、「空は地面の上までであるのでしょ。だから青空を下まで、まんべんなく塗りなさい」等といっていることがあるが、それは子どもの絵のシンボル性と写実を混乱しているので誤りというべきである。

写真④をみてみよう。

これは遠足のときの絵であろうか、「お山にのぼったの。お山

には木がいっぱいあってね。小鳥さんもいたの」等という絵である。この場合山の曲線の一つの基底線になっている。したがって、人も木もその基底線に垂直にかかっている。このことは水平にかかれた基底線にもが垂直にかかっていることと同じである。

例の太陽が上の隅

にかかっているが、人のような目鼻のついた太陽で、アニミズムが残っている。これはほとんど世界中の子どもの絵に見られる現象である。

ここに絵はないが、画面の中に道路を表わす二本の線があり、その両側に人や家がひっきりかえったようにかけられる絵や、運動会の紅白球入れのようすをかくのに、丸い輪の外側に子どもたちが、みな寝ているようにかけられる絵など、いわゆる倒置表現（ひっくりかえった絵）は、実は初めに述べた基底線の原理の発展した型なのである。ローウェンフェルドはこれを「一本の針金にものを結びつけ、それを山形にすれば写真④のようになり、まるく輪にすれば展開図法のような絵になるのだ」と明快な解釈を与えてくれている。

一般的五歳児の絵の特徴は、

- a 大概の子どもが基底線をかき、その上に物を並べてかく。
- b 単独描写から生活を描く傾向が多くみられる。
- c ものともとの関係位置がととのってくるが、印象の強いものを誇張表現する。
- d 展開図法、レントゲン描法が多く見られる。
- e 空想的表現が多い。
- f 線の表現に加えて面的着色が増してくる。

手先の動きと子どもの感情③



清水 エミ子

◎手の反応を、手にかえしていく

あれなんだろうねって ippetteみるとき しんたろうちゃん
目をパチパチやって そのつき手のゆびをこちょこちょうごかす
んだよ。それで また目をパチパチやって やって そおっとさわる
んだ。

ぼくしってるよいつもやるから。せんせいもみててごらん。

おにわでひかったいしみつけたときも けむしみたいなしろうい
むしが つちからでてきたときもそうだったもの。

しんたろうちゃん 手でつかむときもピクピクとうごかして
から つまんだよ 手って おもしろいねえ。(よしひき)

ひろきくんて 手のうえのところ(手くび) くるくるまわると
ころを まわしてから なんかやるのねいつでも。

手のうえのところ(手くび) くるくるまわしているとき くび
がひっこんでるみたい。そいでちっと、あかいかおする。せんせい
に なにかやんなさいっていわれたとき いつもそうなんだ
よ。

じぶんでやるっていったときでも やるときになると そうい
うふうになるの。どうしてだろうねえ。

じょうずにできるかどうかしらべているのかなあー でもへん
なの。(とあこ)

やっちゃん　くれよんで　えをかくとき　パン　て　手をたたいてからかくよ。

おしまいって　いって　またパンパンて　手をたたくの。おわりのとき　おおいおとにたたく。

やっちゃんて　おとなみたいでしょ。

つみきやってても　パンパンて手をたたいてつんだりするから　だれがつみきやってるかって　みなくたつてわかっちゃうんだ。やっちゃんがやってるのって。(しげる)

子どもたちのほうが、私たち保育者よりはるかにひとりひとりの友だちの心の表現の特徴をとらえているのにおどろきます。こんなことを聞かされて、あらためてしんたろう君やひろき君、やすはる君の手を、いいえ、表現の仕方を見つめてみたのです。

全くすなおに手くびが、手、ゆびが、語りかけ(自問自答)いろいろのことをうたえているのです。

しんたろう君の目をパチパチやって手指の第二関節までをこきぎみにうごかす反応も、そのときそのときによってちがっていることがわかります。

1 思いがけないことを見つけたとき

まわりの葉っぱが動いていないのに、散りかけた一枚の葉が風

にくるくるまわるように動いているのを見つけたときなど、目をパチパチさせる早さも早くなり、ゆびさしをする人指しゆびのこきぎみな動きも、大きくゆび全体を動かしているのです。そして、まず、手で反応をして、じっと兎つめてから、「おかしいぞ、あれだけいっぱいゆれてる、へんだぞ、かぜって、みんなおんなじはずなんだぞ、いっぱいゆれるはずがないんだけどなあ」といってながめまわし、うしろからよこからのぞきこんで、終わりにその葉のまわりに手をかざしてみ、近づき、かれかけていることを発見したのです。

「もうすぐ　しんじゃうから、やだやだって　いってたんだ、このはっぱ、かわいそう」と、つぶやき、また、目をパチパチやっていたのです。

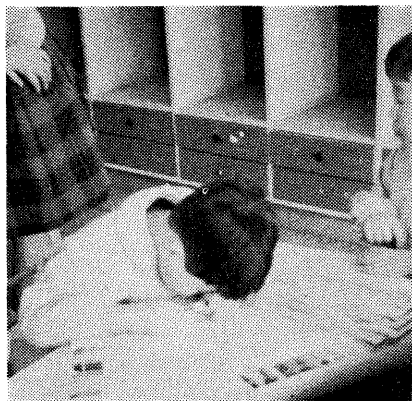
2 はじめての経験を前にしたとき

(ハンコあそび)

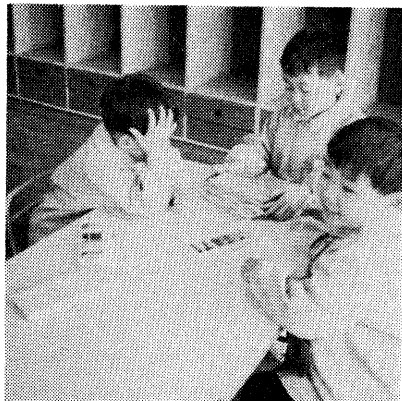
えのぐで作った、スタンプ台に、はんこをのせようとするときなど、目のパチパチもゆっくりになり、ゆび先の動きもゆっくりになり、じっと見つめないで、みのがしそうになるのです。

そして、はんこの前で、ゆびをちょっとふれてみるから、「どんなになるか」「よし」などと、口の中でつぶやいてから行動に移っています。

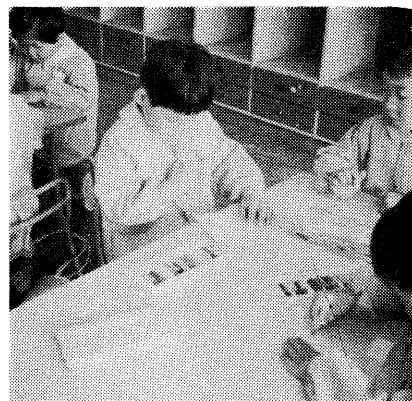
◎かくこわさが手から手へもどってかきはじめる



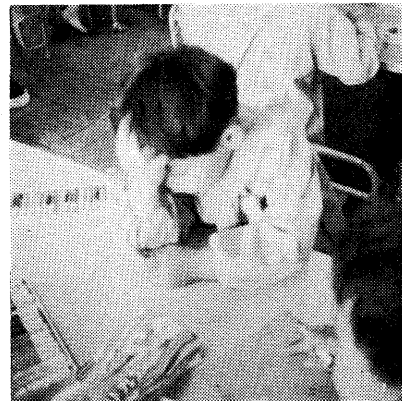
写真③ どうしようかなー



写真① かくことがこわくこまっている



写真④ こわさがとれてかきはじめる



写真② こまったなー

はじめての経験に対して、どんなことにも積極的に参加できる子ですが、一回やってみて気に入ったときと、気に入らなかつたときのゆびや手の反応がちがうことを発見したのです。

気に入らないときは、人指しゆびと親ゆびで輪をつくり、人指しゆびの先で、親ゆびをはじいているのです。フィンガーベイツィングをしたときも、はじめはいやがって同じ反応だったので。

気に入ったときは、右手の人指しゆびをゆっくり動かして、ほったたをいじっているのです。

こんな反応の傾向がわかってから、私は、しんたろう君に（気に入らないとき）ちょっと目先をかえてから、その活動に移らせるようにしてみました。

フィンガーペイントをしたときも、はじめにわりばしで、線をかくようにきそったり、ゆびにビニールの袋をまいて絵具をかきませさせてから、他の友だちのは、ゆび

でかくから指紋がみえること、袋をかぶせてやったのでは、指紋がでないことをみせておいてから、しんたろう君自身で絵具にゆびをつっこませることにさせたのです。

このように、しんたろう君のゆび先の動きをみつめていると、「先生、ぼくこれいやなの」とか「ちよっとやだな」とか「もつとちがうこともやってみたいな」という要求がはつきりよみとれるのです。そのためにしんたろう君に、失敗感を強くもたせずすみ、やってみるたのしみ、やればできるという自信を身につけることができたのです。

(しかしその子に必要な失敗はさせなくてはならないが)

◎ひろき君の手首をぐるぐるまわす反応

自分の行動のブレイキ役をはたしている手首。

だれか友だちの声が耳に入ると、自分がなにをやっている、その方が気になる、うつり気な性格なのです。(しょう動的に行動する)

そしていざその場にのぞんだとき、我にかえり、これは自分の手におえるかな? と考えたときに手首が動いているのです。

手首を動かすことよって間をおき、どうそのものに対処したらよいか考えるようです。自分の手におえないな、と気づいたとき、手首のまわる回数も多く、首も背の中にめり込んでいくので

す。

手首をまわす余ゆうもなく活動につき進んでしまったときは、きつと失敗しているようです。

ひろき君が、手首をまわしていることがわかったときには、保育者は、ことばかけをやめ、じっとまわっていてあげることが必要なのです。途中でことばかけをしてしまうと、このブレイキを自分で、きかせることができなくなってしまうからなのです。

手くびのまわしが終わったとき、ひろき君の呼吸も、みだれがおさまり、ゆっくり口が開いたり行動に移ったりできるようになることを発見したのです。

ひろき君の手まわしは心の安定剤とブレイキの役も果たしているのです。

やっちゃんの手をバンバンとたく合図をじつとみていると、バンバンとたく前に、手の平をちよっとそらせること(ゆび先をそらせる)それと同時に、ペロ(舌)で下くちびるをペロリとなめることが、同時くらいにおこなわれ、そのあとにバンバンと手を打っていることがわかったのです。

だから、やすはる君が手をバンバンと打つときは、もう、これだよし、さあやるぞという、かまへの表情のようです。

手のゆび先や平をそらせたり、片手で平をなせたり(これはと

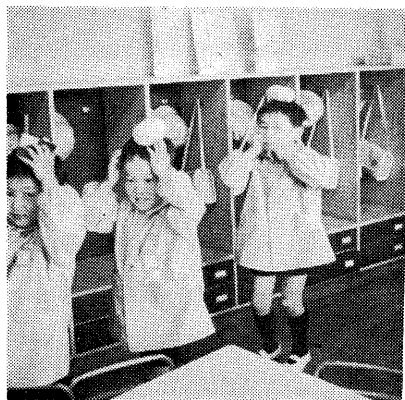
◎玉がおちる不安に対する恐怖が手にあらわれている。



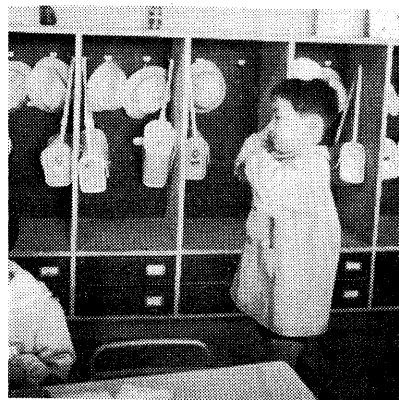
写真⑦玉は頭にのる 手の表情…



写真⑤頭にのせようとする



写真⑧



写真⑥おちそうなので手でカバーしている

きどき、特にこまったときに表われるよう
だ) するときは、さてどうしようかと、心
が新しいものに立ち向かったときの表われ
と信号のようです。

そして心が新しいものに立ち向かってそ
れに対して取り組むみちすじやとば口をみ
つけたときに、よしこれでいい、とかこの
へんからやってみるぞ、という合図のバチ
バチの手ばたきの表現がおこるのです。

バチバチとせっかちに間隔短く打つとき
は、いちかばちかやってみようとするほう
けんを決意したときの表われのようです。
バチ、とひとつゆっくり打つときは、行動
や活動、問題の解決に対する見通しがはっ
きりもてたときに、安心と余裕をもって
打つので、ひとつで事がたりているよう
です。こんなおちついた態度のときは、くち
びるをなめることがなくて行動に移ってい
っているようなのでわかったのです。

活動が終わったときのひと打ちや、こきぎ
み打ち、活動の途中で打つバチバチは、そ

のときどきのうったえがあるようです。

・活動を完成したという克服感のバチ

・見通しがまちがえて失敗してしまった無念のバチバチ

・一段階終わったぞという活動の区切りを確認するためのバチ

・一区切り終わってその先、どうしてよいかまよってしまったときのバチバチ

などがあることを見分けることができたのです。

私は、ここまで、子どもたちの手をじっと見つめて来たとき、ひとつの迷いを感じ始めたのです。

子どものくせと、手の動きを、どう区別したらよいか？ ということです。手は、顔や体より早く心を表わしてくれる心を表わす、第一の表現場所のように考え見つけてきたけれど、これはひとりひとりの、表われのくせを見つけているのではないだろうか、だから、私が見つめようとした手や、ゆび先のうったえ(表情)としては、ややズレがおこってくるのではないかと、まよいが生まれたのです。

そして、もう一度、クラス全体の子どもたちの手、手の平や、ゆびの先を見つめなおしてみたのです。

同一場面での手やゆび先の観察

・同じ経験や活動を、同じとき同じように体験しているのに、

ひとりひとりの顔がちがうように、全員の手表情は、ちがっているのです。

しかし、A君、B君、Cさん、Dさんと同じ傾向の表われ方をするのだ(こまかい部分の表われはちがうが)ということは、大まかなワクとしてつかむことができるように感じました。(これは、わずかな事例でだんていしてはいけないことなので、これから多くの事例で考えていくつもりです)

例①どんな子どもも同じように体験でき、理解できる活動で、手の表われを観察することにしたのです。

他のクラスの友だちの前において(一定の場所に立っている)自分の名前をいって手をつないで一定の場所まであるいてくる、という活動を指示してみたのです。

条件、このとき、男児は男児と組む、近所や仲よしをさげ、遊んだことのない人、名前をしらない友だちと組むように配列して実験してみたのです。

1、知らない友だちの前に入ったというだけで手やゆびが反応を示す子(あまり自立たずに)。

2、向かい合っただけではまだ安定していて楽に体のよこに手がダラリとさがっているが、名をつけるときになると手の先だけをもじもじしてからでないか自分の名をつけられない子。

3、ぼくあの人だな、とか意味もなく、うでから手全体を動か

し体もじっとしていられないような、体全体で反応してしまっている子。

4、ひと区切りの行動から次の区切りの行動に移る時にその合図のような手や、ゆびが反応をしている子。

(1)友だちの前に立つ (2)名前をつける (3)手をつなぐ (4)あるいてくる

などの行動移向のときにおこる緊張などの心の動きを表わしている子のように、四つに大別できるのではないかと思われるのです。

この大別された中で、ひとりひとりをみつめると、こまかい表われは、ひとりひとりがっているのです。

そして、この四つのタイプそれぞれが、まず手で反応し、表われを示し、そのことがらを、また手にもどして行動したり、反応したりしているということが、実験場面を通してうかがえたのです。

例②

はじめての場面や活動に入ったとき

○なわでんしゃをつくって、でんしゃごっこしたとき、

場面 ホールに なわとびの(木線)なわを輪にした、なわでんしゃを数本作って置いておいた。(床に無ぞう作に)

方法 なわでんしゃのいちばん近くにいつてみていたせいいち

に、「つかってもいいのよ」と声をかけるだけにした。

(1) せいいちち「うん」と答え、なわに近づき、こしをおろして、右手の親ゆびを横にうごかし、中ゆびのゆびのはらを二度三度、おうふくなぜをした。

そして左右をみまわし、なかよしのやすはるを「おい」とよんだ、せいいちち、やすはるを呼んでいる間も、何回かゆびで中ゆび人指しゆびのはらをおうふくなぜしていた。

やすはるが近づいて「これなあに」ときくのと同時に「まるのなわなの」とせいいちちははなしながら、左手でなわをそっとさわってみた。

このときの右手は、かるくにぎられていて、左手の第一関節だけでつかんでいた。そして「はいるうか、やっちゃん」と顔をみあわせてから、左手と右手で、なわをわしづかみにして、体の中に入れた。

親ゆびのはらで中ゆびと人指しゆびのはらをこする反応を、左手のゆびで、さわってにぎるといふ行動に移しているのです。

(2) ゆみこは、つなを上からながめながら、

右手の親ゆびを上へのばし、なわの四本を手の平のところできったり、ひらいたりして反応していた。手の先は、たてにおかれ、親ゆびをアンテナのように立てて、のこりの四本をあかちゃんのにぎにぎのように、にぎったり開いたりをくりかえしたあ

と「なにするんだらうなあ」とひとりごとをいって、立ててあった親ゆびを、口の中に入れて、しゃぶってから、右手と左手を同時になわにつけて、にぎって、ひきずってあるき、友だちのまゆ子に「やろうか」となわをさしだしてふたりが中に入って、でんしゃののってかけまわっていた。

右手のにぎにぎの反応、左右の手でなわをつかむ行動に移していったのだ。

(3) ひろかずは、「なわでんしゃのえきをつくらう」とつぶやいて、平均台の所にかけて行き、ピタリと止まり、平均台に手をかけもち上げたが、重くて動かない。まわりをみまわし友だちのけんじをみつけ近づいた。

「ねえ」とひとこえ声をかけて次のことばにつまったとき、ひろかずの右の手の平は、自分の右の胸を上から下に、早い速度でなでおろす反応をして次ということばにつまっていた。

三、四回なげて胸の上に手の平を止めて、「もってよ、おもしろい」とまっ赤な顔でたのんでから、右手を胸からおろして平均台の上ののせ、次に左手を平均台の下にかけてから右手も下にまわして両手で平均台をもち上げ、けんじの手助けをまっていた。

手の平を胸にあててこまった反応をし、次に左手と右手を平均台の上ののせてから平均台をもち上げる行動に移している。

(4) とあこののっているなわでんしゃに「あんたものりなさい

よ」とあゆみはさそわれ、なわを胸もとにおしつけられた。びっくりしてあけみはしゅんかん、左手をパッと左のほっぺにもっていった。ほっぺたにゆびの甲をおしつけて(ゆびの先を下に向けゆびの甲をほほにおしつけて)目をつぶった。そして次のしゅんかんに、両手の平をなわにおしつけ、「やなの、のんないの、いいの」ときょひの行動を手の平で行なっていた。

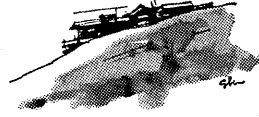
左手の甲をほっぺに持っていて、こまった、というまよいの反応をして、次に両手の平できょひの行動に移している。

このように、子どもたちの手の動きをみつめていると、その表われには個々のちがいはあるが、どこよりも早く(外に表われるところのなかで)表われる反応が、手でありゆびであり、その手やゆびの反応を、次に、手やゆびにかえして行動している、というところが、わかったのです。

今回は、誌面のつごうで、なわでんしゃの事例の報告しか記せませんでした。もっともっといろいろなはじめて出あう場面での反応と行動を観察し、子どもたちの心の動きと行動の特徴を、手とゆびからとらえてみたいと思います。

そして、子どもたちの心の動きをまがえなくとらえ、集団生活のためのしく創造し、ひとりひとりの生活が充実しておくれるような保育の手助けをしたいと思うのです。

(太田区立蒲田幼稚園)



サンド・プレイ・テクニク

(箱庭療法)について ③

秋山達子

今回は、日本におけるサンド・プレイ・テクニク（箱庭療法）についてお話ししたいと思います。前回にも書きましたように、この療法は英国のローヴェンフェルト夫人によって創作され、スイスのカルフ夫人が現在の形にまとめられたのですが、日本には今から五年ほど前に天理大学の河合隼雄先生が、チューリヒのユング研究所から帰って来られて、はじめて紹介されました。

ユング研究所では、河合先生をはじめ現在同志社大学におられる樋口先生とカリフォルニア大学に行かれた目幸先生、そして私の四人が日本からの留学生でしたが、東洋のことが好きなカルフ夫人は、何かにつけてよく私たちを招いて下さったので、

よく揃ってカルフ夫人の自宅で開かれたセミナーや講習会にまいりました。そしてこの療法はぜひ日本にも紹介したいものと話し合っていたのですが、河合先生から三年半ほど遅れて私が日本に戻りました時には、この療法が特に河合先生や樋口先生のおられる関西方面では、非常に多く用いられているので驚いたくらいです。

日本人は昔から盆石や箱庭などの小さい情景を作って楽しむことを知っていますし、また美的な感覚と情感にすぐれた国民ですので、この療法もごく自然に日本人に迎えられたようです。日本における事例も、京都のカウンセリング・センターの方々を中心にして、多く発表されておりますが、安田生命事業団の相談室や東京大学の教育相談室でも早くからこの療法をとりあげて、いろいろと研究されています。

今回は、やはり実際の治療過程にそってご説明した方がわかりやすいように思いますので、東京大学の近藤邦夫先生による事

例を拝借して、サンド・ブレイ・テクニク（箱庭療法）とお伽話の関連性について

書くことにします。ただここで一言お断わりしておきたいのですが、最近研究のために事例が公表される場合が多いようですが、これは来談者にとっては精神的に重要な意味を持ち、また治療者にとっては血と汗の結晶であり、そして二人の関係の中で育った一つの魂の遍歴の記録であって、簡単に公表されるべき性質のものではありません。今回は特にこの療法の紹介のために、本人とそのご家族、治療者のご好意によって発表させて頂くことになりました。小学校五年のK君は、外に出ると誘拐されるという学校にも行かれないようになりました。その他にも、人は嘘をつくから信用できないといったり、死んだおばあさんの声が聞えるといったり、また時々発作的に暴れたりするので、お母さんが心配して相談所に連れて見えたのです。二歳下の弟は大変気のつく良い子で、この時もいっ

しょについてまいりました。

K君は一人ではブレイルームに入れないので、お母さんがいっしょに入りました。壁に向かって坐ったまま「なにかがぶっそうだ、なにかがおかしい」といって、しばらくは身動きもしませんでした。そのうち傍にあつたくさり鎌の玩具を手にし、はじめはそのくさりをお母さんの体に巻きつけたりしていましたが、そのうち鉄砲やライフルを床に落して、くさりでそれを釣る真似をして「鉄砲魚だ」と叫びました。

次に鎌で草を刈る真似をしましたが、床にはたくさん草が生えているので、刈っても刈ってもなかなかきれいにならないのだそうです。「また草が生えてきた、根が残っているからなあ」というので近藤先生もいっしょに草を根こそぎ引き抜く真似をして、それを集めてたき火をして手をかざして暖まるような遊びをしました。最後には陣地を作って玩具の機関銃で撃ち合いをしたのですが、機関銃が大きな音をたてたの

でびっくりしてすぐやめてしまいました。

さてこれらの遊びは一体何を意味しているのでしょうか。これは水の象徴と火の象徴を主題にした遊びです。水は無意識をあらわし火は意識をあらわすといいますが、K君は無意識の中にいっばい恐ろしいものがあるようで、それが今にも外に出てきそうてわくわくしょうがないのです。そしてまわり中のものが、なんだかあやし気に見えるのです。それからくさり鎌をお母さんに巻きつけたりします。

前の晩も手錠でお母さんと手を結び合せて寝たのだそうですが、K君にはお母さんさえ信用できないで、なんだか今にも逃げて行ってしまいそうなので、くさりでしっかり結びつけておかないと安心できないのです。そしてK君のやりたいことは、水で示されている無意識の中を、うようよと泳いでいる攻撃性、つまり鉄砲魚を釣りあげて、思わぬ時に攻撃的な気持が暴れだしたりしないように、しっかりと自分のものにす

ることです。それから土の中の意識の下から、あとからあとから生まれてくる不安を刈りとりたいのです。でも刈っただけでは駄目で、それを皆根こそぎ抜いてたき火をしなければなりません。そして火が燃えて煙があがるようにその不安をとりだして意識化したいのです。そうしたらきつとこわいことなんかなくなるでしょう。

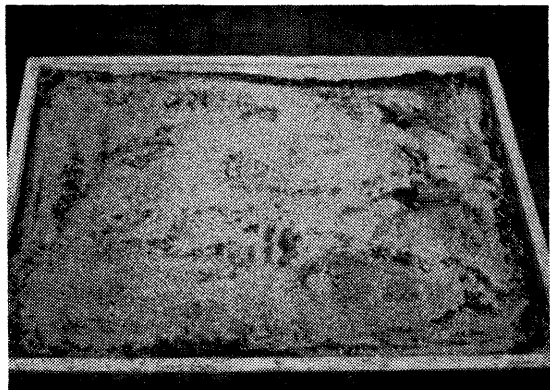
ところでこの遊びは日本の民話の海幸彦と山幸彦のようではありませんか。いつも山で狩りをしていた山幸彦は、ある日お兄さんの海幸彦と仕事をとり変えて海で釣りをしますが、釣針を魚にとられてしまいました。そこで山幸彦は海の中に釣針を探しに入って行って豊玉姫とめぐり合うというお話です。

でもそれよりもこの遊びはお伽話の桃太郎のはじめとそっくりです。むかしむかしおじいさんとお婆あさんがおりました。おじいさんは山にしば刈りに、お婆あさんは川に釣りに行ったわけではありませんが、

でも大きな桃を釣ってきました。私はこの遊びのことを聞いた時に、今にK君は鬼ヶ島征伐に行って宝ものを持って帰るかもしれない、と冗談のようにいっていたのですが、あとで箱庭の作品の中に鬼があらわれた時には本当に驚きました。K君はまず海の中を泳いでいる攻撃的な気持を釣りあげることでしよう。でもまだこの時は玩具の機関銃の音にもおびえるような弱虫でした。

二回目に来た時に最初の箱庭の作品ができました。砂箱の砂漠に飛行機が降りてきて、おおぜいの人がバスに乗り変えて水を探しに行くのですが、水は見つかりません。そこで近藤先生は砂を掘って底の青いところを出して池があるよといってみましたが、K君はそれは屋気楼だといってすぐ砂で埋めてしまいました。そのうち砂嵐が来て「バスは砂で埋まってしまいました。中の人たちはどうしたのでしょうか」といって全部砂に埋めてしまいました。それが掘り起こして今度は自分で池を作り、そ

写真(一)



こで人々は水を飲んで安心してまた飛行機に乗って帰りました(写真(-)参照)それから砂の上にウルトラマンと怪獣を並べて戦わせますが、ウルトラマンは怪獣を砂箱からたたき落としてしまいました。

かわいそうにK君は、心の奥に恐ろしいものがたくさんいるので無意識である水が

こわくて断ってしまったので、そこから中乾きになってしまいました。無意識というものは、なんだかはつきりしないで恐ろしいものですが、しかし人間が生きていくのに欠くことのできないうるおひも与えます。水は溢れて洪水になると被害を与えますが、人間は水なしでは生きることができないのです。でもK君は最後には池を作って水が飲めるようにしましたし、ウルトラマンがあらわれて恐ろしい怪獣共も退治しました。K君も生命の水を飲んで元気になって桃太郎のように鬼征伐に行くのでしよう。しかし砂嵐でバスが長いこと埋まっていたように、桃太郎が生まれるまではまだ長いことかかりそうです。

その後は二回ほど陣地を作って戦争ごっこをしましたが、K君はとも弱くて、すぐに撃たれたといつて倒れてしまうのです。砂箱の上には何度も偵察の飛行機をとばせましたが、皆墜落してしまいます。そして時々バスが砂漠をさまよいますが、砂

嵐に巻き込まれて埋まってしまいました。

四回目は、男子の人形を見つけ、眠り病にかかっているからといって床にたたきつけたり、水をかけたりして起こそうとしました。また目覚し手術だといってナイフをおなかにつきつけてそこから管で水を注射したりするのですが、起きません。そこで人形を裸にしてきれいに洗って白いタオルで巻き、一週間の安静が必要だからといって大事に部屋の間において帰りました。

その次の時はお城の構築とこわし合いの遊びで、K君はなかなか勇敢に戦うようになりましたが、その騒ぎで男子の人形はどうとう死んでしまうことになり、傍にいたキュービーもけがをしたので傷にテープをはりました。そして水道の水を出しっぱなしにし、大きな象の玩具を下において「流れが早すぎて象が溺れそうです」といいました。どうやらK君の中の男子らしさは眠り病にかかっているようです。そこで大手術が行なわれましたが、人形は起きませ

ん。そのうち陣地のとり合いやお城の崩壊でどうとう人形は死んでしまい、無意識の水の流れが早くて象も足をとられて溺れそうです。さあ大変です。本当にどうなることでしょうか。でも象は重いから流されな

いし、なんとか助かるとよいのですが。それから第二回目の箱庭の作品ができました。右手には大きな沼を作り、底の青色を出すだけではもの足りなかったのか、本当の水を入れました。その中にはカバや象やカメをおきワニが一匹水から上がりかけています。中央の手前には小山があつて、その上でライオンが鹿を食べています。その上手にもう一頭のライオンが鹿を食べていますが、さらにもう一頭の鹿がライオンに食べられないようにずっと上の方に避難しています。左下からゴリラが他の鹿の群を連れて救援に向かっています。中央左寄りには毒トカゲやゴキブリのいるジャンクルがあつて、ずっと左手に熊のいるトンネルと電車の家があります。この家は

はじめはK君の家だったのですが、ゴリラの家となります。右下隅には蛙が一匹、左下隅には人間の作ったおとし穴というのがあって、そこにバクがはまっています。右上隅に同室していた弟が反対側から柵でかこってヘリコプターで楽隊や人間を連れてきて楽しい人間の世界を作りますが、K

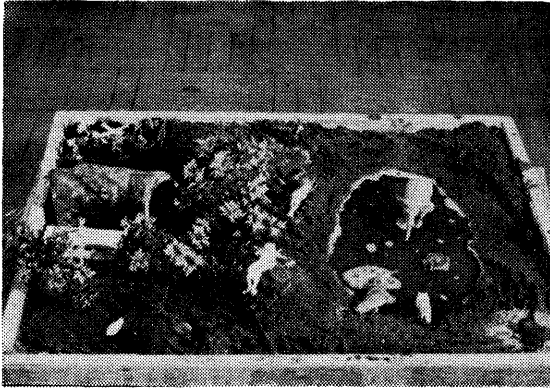


写真 (二)

君は人間をとって全部沼の中に沈めて殺してしまいます。突然ゴジラがあらわれて動物を全部砂の中に埋めてしまうのですが、ゴリラだけは生き残ってゴジラをやっつけて砂の中に埋め、動物はもう一度掘り出されて助かりますが、人間だけは悪いことをするからということで水の中に沈められたままです。熊がトンネルからのこのこと出てきます。やがてゴジラも許されて「もう悪いことはしません」といって謝ります。そして平和が訪れ、バクがはまっていた穴はゴリラがボートを浮べて遊ぶ場所となります。(写真(二)参照)

この箱庭の作品は動物がたくさんでてきでなかなか説明が難かしいのですが、まず目につくのはライオン族と鹿族の戦いです。やさしい鹿の群が左下の方からあらわれるところを見ると、恐ろしいライオンは右の外の方から来たのかもしれない。気が弱くてすぐ負けてしまうK君の持っている攻撃性が内に向けられて、心の奥にひそ

んでいるやさしい感受性を食い殺しているようです。でもゴリラにひきいられた鹿の大群が救援にかけつけています。ゴリラの家はK君の家でもあるようですから、きつどこのゴリラはまだ無意識の中にいて人間になりきれないK君自身のことかもしれない。右下隅には蛙がいますし、ワニも沼から上がってくるところですから、きつと無意識の中から蛙のようにとび上がってくることでしょう。そして左下隅の心の一番奥深いところに、人間の作ったおとし穴とかがあります。これがあるのでK君はこわくて外にも出られないのでしょう。でもこの穴は後でゴリラの遊ぶ池となります。このような池はうっかり落ちると大変ですが、また無意識の中の生命力を汲み出す井戸のような役割もするのです。そして最後に力強い熊が穴から出てゆっくりと右の方に向かって歩きだしました。

K君が相談所に来るようになってからちよほど一月半程たった頃、大変印象的な第

三回目の箱庭の作品ができました。まず最初に砂箱の右側に水を入れて海とします。そして砂箱の左上手の枠の上にラップ手が立ってファンファーレを吹きながら、これから一場のドラマが演じられるところです。そしてブルドーザーが海に向かって土を押し進めて干拓工事がはじまります。

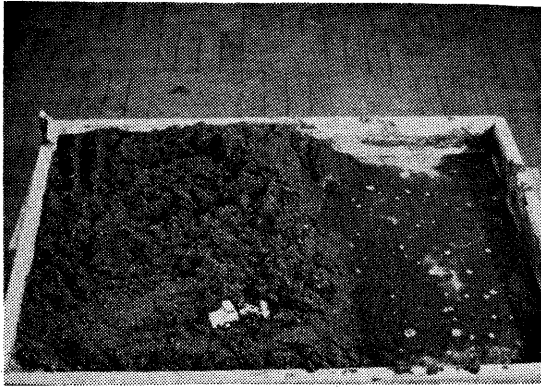
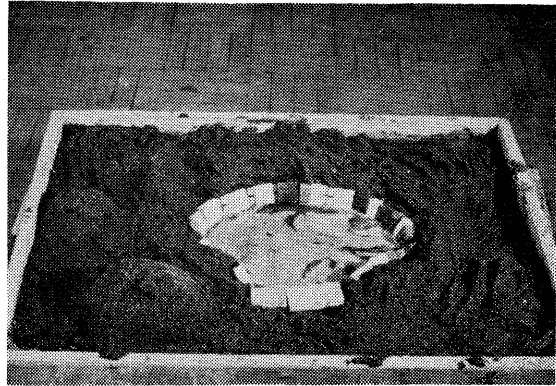


写真 (三)

写真 (四)



(写真(三)参照) 次にすっかり陸地になった砂箱の中央に丸い湖ができて、K君の名前をとってK湖と名づけられます。砂がくずれて水が濁るのでブロックと積木で護岸工事もなされます(写真(四)参照)それから湖の中にドロドロの砂で山を作ります。「もつと高くなれ、天にとどくまで高くなれ」

といいながら砂を積みあげますが、水があふれそうになるので水門も作ります。そして最後には湖の中の山はしっかりと固められて高い山になりました。右上に高い木が一本すくすくと伸び、右下にはトンネルがおかれました。(写真(五)参照)

さあ無意識の海は埋められて、その代り

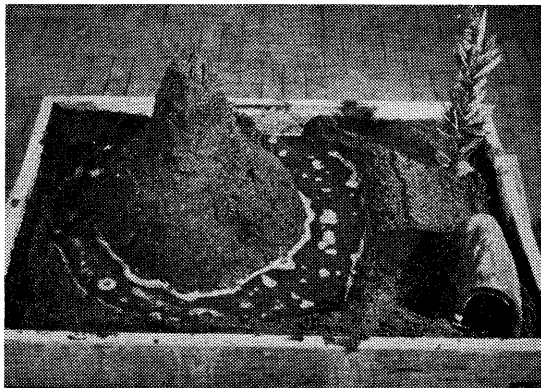


写真 (五)

にしつかり護岸工事のできた生命の泉であるK君の湖ができました。そしてその中から高い高い山があらわれました。これはK君自身の中に生まれきた新しい意識でしょう。でもこのように新しくできた山や島は、まだK君の思うように統制できない領地です。お伽話や神話では、たいていこういうところには鬼や巨人が住んでいて、自分たちで勝手に暴れたり悪いことをしたりしています。さて鬼ガ島はできたのですが、桃太郎はどこにいるのでしょうか。右上隅にはK君のすこやかな成長をあらわすように木が一本立っていますが、右下のトネルは何を意味しているのでしょうか。

K君はその次にきた時には金髪の女子の人形をとりだして、この子は悪い子だからといって短刀やバットやハンマーでめっちゃめちゃにたたいたり突いたりしていじめました。そして手足をバラバラにしてその上に積木を乗せたり、水責めにして髪を引き抜こうとしましたがなかなか抜けないので、人形の上に自動車や家やカバなどを積み重ねたので、とうとう女子の人形は死ぬことになりました。(写真(六)参照)次に以前「眠り病」にかかって死んでしまった男子の人形のお墓を作りますが、そこから人形をとりあげて、「この子は生き返った、さっきの子の魂が乗り移ったのだ」といって心臓移植の真似をして遊びました。さらにお城の崩壊の時に生き残ったキュービーもとりだして傷にはってあったテープをはがして「この傷も治った」といいます。そして赤インクを壁に投げつけて「血だ。僕も傷を負った」といって、さらに積木の山に登ってそこから崩れ落ちるような遊びを何度も繰り返し、最後には積木やボーリングのピンを部屋中に投げ、とうとう高いところにある窓ガラスを割ってしまいました。

お伽話や神話でも、よく主人公が一度死んでから生まれ変わったたり、呪文をかけられて長いこと眠っていたり、また土の中に埋められたりしますが、このようなお話や遊びは死と再生の主題に基づくものです。しかし生まれ変わることはそんなにやさしいことではありません。今までの気の弱い意気地なしのK君は一度死んで強くて男らしいK君に生まれ変わらなければならぬのですが、K君はインクを投げて、血の色をながめてみたり、人形をいじめるだけ

写真(六)



はなく、自分も積木の山の中に埋もれて死ぬ苦しみを味わい、苦しまぎれに窓ガラスを割ってしまったります。

このような激しい遊びが、それから数回続きました。女子の人形を水浸しにしたり、男子の人形を何度も窓から投げてはそれをとりに行く遊びが繰り返されて、近藤先生に向かってこわい程の力でボールを投げたり、こわれかけた玩具は「こわし工場だ」といって全部こなごなにたたいてしまったりして、桃太郎は生まれかかっていないのですが、桃の固い核がなかなか割れないのか、中で大暴れをしているようです。そしてやっと次の箱庭の作品が生まれます。砂箱の中央に湖を作り、そこに家をおいて水をどんどん入れます。その上にドロドロの砂をかぶせて山を作り、さらにその上に積木ではじめは門を作るのですが、やがてそれは人の姿になります。この人は一度死んで生まれ変わったのだそうです。そして家を砂の下からとりだして室の外に投げ

すてます。

次に砂箱の上部の方に陸地を作り、積木でまた別の塔を作ります。この塔は先生の顔で陸地は先生島だそうです。波がうちよせて水をかぶったりします。最後には、塔を弓で射て激しく倒してしまいました。

さあやと桃太郎は生まれて成長し、門を開いて家を投げすてこれから鬼ガ島に向かうところです。はるか向こうに鬼ガ島である先生島、鬼である先生の顔が大きく見えてきました。岸には波が打ち寄せています。そして最後には塔を弓で射倒しました。鬼を退治する準備ができたようです。

その次の時から湿った砂はいやだといつて箱庭を作る時に水を使わなくなりました。さあいよいよ鬼ガ島の情景です。中央左手の積木の家に赤いガラモンの鬼の大王がいます。右方にはゴジラやエビラやバルタン星人などの赤鬼、青鬼が番をしています。左下にはK君の家があつて、ベンチがあり、ここでガラモンとにらめっこ

をするのだそうです。右下には犬や豚もいます。ペットにガラモンを飼っているのだそうです。怪獣たちは餌の注文が難しく、糞の掃除も大変なのだそうです。ガラモンが散歩をする時には危険なので、家や動物は皆地下にもぐります。(写真(七)参照) K君はいきなり鬼退治をしないで、鬼

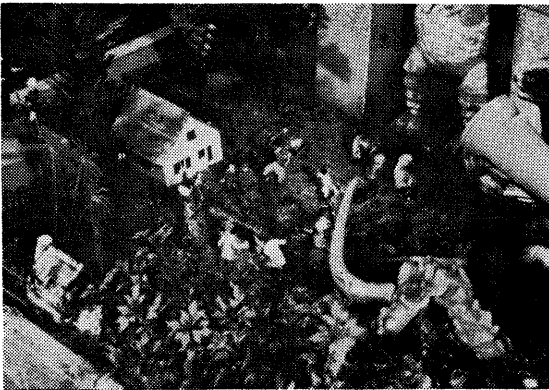


写真(七)

をそろそろ飼いならしているようです。でもまだ鬼が外に出てくると危ないのでかくれないといけません。そしていっしょけんめい鬼とにらめっこをしてよく鬼のようすを観察しているところです。

K君が相談に来るようになってから三月程たった時に、はじめて箱庭の作品に人間が登場しました。今度は前の時と同じように鬼の大王が中心ですが、カネゴンは蝶ネクタイをつけて大分紳士になりました。ゴジラはバズーカ砲を抱えています。左上隅には朝日をあびた新緑の若木が三本、右下隅には夕日にはえる赤っぽい木が二本植えられて、空には太陽が輝やいていることを暗示しています。左下隅に赤い大きな積木の台がおかれています。そして赤ちゃんが指揮するダンプカーに乗って人間が大ぜいで強盗に入りますが、カネゴンと話し合っで鬼の仲間入りすることになります。赤い台の上には楽隊が並び赤ちゃんの指揮棒で音楽が演奏されます。この赤ちゃんは桃

太郎のようですが鬼退治ではなくて鬼ガ島に強盗に入っています。でも無意識の世界に押し入って鬼共の貴重な宝ものを奪ってくるのですから、鬼の方から考えれば強奪のようなものでしょう。そして戦わないで鬼と仲良しになっていっしょに遊ぶことになりす。ガラモンの家の前で大ぜいの人



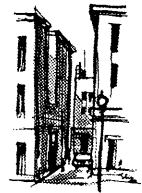
写真(八)

が輪になって踊りはじめました。ゴジラはバズーカ砲のクラッカーで祝砲をあげ、紙テープがとんで鬼も人もいっしょになって踊りました。(写真(六)参照)そして夜になると人間たちは鬼からおみやげの宝ものをもらって帰りましたが、鬼共はその後一晩中踊っていました。

このようにして、K君はその後二年間も相談室に通って、海底火山の爆発の遊びや地底都市の箱庭の作品を作りましたが、学校でもすばらしい絵を描いてごほうびももらったり、修学旅行にも行き、今では一人でお買物や散歩に行ける元気な子どもになりました。

箱庭療法は、このように遊戯療法と組み合わせて使用するのが、最も効果的のようです。それにしても、箱庭の作品や遊びの中に、お伽話や神話の主題が、はっきりとあらわれてくるのは本当におもしろいことだと思います。次回には児童と母親の問題についてご説明することにしませう。

ヨーロッパの旅 (四)



平井信義

ストックホルムを飛び立った飛行機は、ロンドンをめがけて南下していく。ちょうど、スエーデンという南北に細長い国を縦断することになる。窓からまじまじと見下ろしていると、大小の湖が至るところに入り組んでおり、その周囲にはうっそうとした森が続いている。その中に、赤や青の屋根が点々と見える。湖に張り出したような家もある。あのようなところに住んでみたい——。

実は、思春期以後に育った一つの夢は、湖畔で静かに暮してみたいということであった。沈んだような青さの水面をわたる風に、ひたひたと音を立てている——その音を、いくつかの日本の湖できいた。その音は、私の心の奥まで洗ってくれるような音であった。その音を、野尻湖畔の一軒家で、ドイツ人の年老いた婦人といっしょにきいた。宍道湖畔の宿屋で、漁火が点滅するのを見ながら、その音にきき入って、夜の更けるのも忘れた日のこと

を思い出す。また、葛沼のほとりの浅瀬に足をひたしながら、ひたひたと寄せてくる水のすがすがしさを肌で感じとったこともある。

葛沼で何日かを送った頃、それは大学生の頃であったが、私は一人の女の子に深く思いを寄せていた。その女の子は、ようやく思春期にかかる頃で、まだまだあどけなさいっぱいの子どもであった。よく、その子を膝の上に抱いて、童話の本を読んでもあげたり、かくれんぼなどをして遊んだりした。すなおで、心根のやさしい子どもであった。その子も私が好きであった。私を「お兄さま」と呼んで慕っていた。手をひいて散歩にもでかけた。

いつの日であったか、その子が私の膝に向かい合わせにすわり、私はその子の手を握りながら、ゆっくりしたりズムをとって、シーソーのようにからだを動かしていた。何回かそのようなことをしているうちに、その子がびたっとからだをとめ、私の目

をじっと見詰めた。そのまなざしは、真剣そのものであった。私のまなざしを押しやるように、心の中に入ってきた。その時、私の口から、「ぼくのおよめさんになってくれるかしら？」という言葉がほとばしり出た。はっとした表情でその言葉を迎えた女子は、私の心を汲みとるように、更に一瞬私の目を見詰めたが、たちまちはずかしそうにうつむきながら、軽くうなずき、再びシーソーのようにからだを動かし始めた。

それ以来、女の子と私との間には可愛い文通が一週間に一回ぐらゐの割合いで、数年間続いた。葛沼の思い出は、二人のつき合の三年目であった。私は、その女の子と二人でこの沼に来る日のことを考えていたのであった。しかし、戦争が、遂に二人の間を遮ってしまった。

このような思い出の中の私をのせて、飛行機はひと息にスエーデンの空を飛んでいく。見下ろされているたくさんの湖沼は青黒く光り、じっと人を待っているような風情であったが、その一つが、あのひたひたという音を立てているのであろうか？

オランダの海岸線を何十分か飛んだあと、ドーバー海峡にかかると、遙かに大きな雲のかたまりが目に入った。その下にイギリス本島があるはずであるが、厚い雲の層は、ほとんど鳥影をかくしていた。

ドーバー海峡をじっと見下ろしていると、白い波の尾をひい

て、何隻かの船が見える。ちょうど十五年前に、この海峡をベルギーのオストエンドからロンドンに向けて渡ったのであった。その日は晴れていたが、風の強い日であった。港を出てしばらくすると、船の動揺は著しくなった。右にかしぎ、左にかしぎ、前にもたれ、後に倒れる——そのような動揺の中で、乗客は次々と船酔いに倒れ始めた。家族が一群となり、夫婦がもたれ合い、ベンチや椅子で生気を失っていた。私も、船には弱い。しかし、一人旅の私には、介抱をしてくれるものがない。船酔いにおちこみそうになる気持をひき立てひき立て、船首へいつてみたり、船尾へいつてみたりした。ロンドン港の到着が六時頃であったのに、日がとっぷりと暮れても、港につくようすがない。右や左に、前や後にゆれながら、エンジンの音は同じ調子が続けている。私はたまりかねて、近くの乗客に、「船はいつ着くのでしょうか？」ときいてみた。

「荒れていて、港につくことができないらしい。ロンドンの湾内にははいつているのだが——」という答えであった。初めてのロンドンであるので、真夜中になったら、どのようにしてホテルまでたどりついたらいいかわからない。どうしたらよいだろうか？と思ってみるが、船はいつこうに着くようすがない。時々、遠くにちらちらとあかりが見え、それがロンドンの町らしいが、再び闇の中へ入ってしまう。たしかに湾内をぐるぐると廻っているようすであった。船員がロープを肩にかけてやってきたので、何

時頃に着くのでしょうかときいてみた。しかし、その答えは「船長だけが知っている」というまことに愛想のないものであった。すこし離れたところの乗客も、私と同じような質問をしたらしいが、同じ答えしか返ってこなかった。

このような時、わが国であつたら、乗客が騒ぎ出すのではなからうか？「いつ着くのかはつきりさせろ」「船長、でてこい！」「早く何とかしろ！」など、憤りを爆発させる者があるにちがいない。しかも、船員の答えた「船長だけが知っている」などの言葉は、人々の感情を刺激して、あるいはつかみかかる者が現われるかも知れない。しかし、この船には、誰もそのようなことをするものがなかった。ひたすらに船長を信じて、身をまかせている——といった状態が汲みとれた。考えてみれば、船長の気持は、少しでも早く安全に乗客を港にまで運ぶけんめいな努力をしているはずである。その善意を信じ、風の状態が変わるのをじっと待っているべきであつた。船は遂に真夜中の二時になって港にいたのであつたが、その間、乗客は船酔いに苦しみながらも、恐らく内心は不安をもっていたことであろうが、ひと言も船員に文句をいわなかった。この事実をどのように考えるべきか、その後、長い間、考え続けていたが、今回飛行機でドーバー海峡をひと飛びに飛びながら、再び思い返されたことである。

飛行機は、海峡の半ばあたりからしばらく雲の上を飛び続けた後、霧の中に突入し、雫を小さな窓にうけたが、やがて視野がひ

らけると、ロンドンの市街が見えた。テムズ河がうねうねと流れ、それに沿って目を移すと、なつかしいウエストミンスター寺院や国会議事堂が見えた。

実は、ロンドンという町は、私にとっては好感が持てない点を、初めに述べておく必要がある。十五年前に来た時も、五年前に来た時も、同じ感じを持った。何となく、人を見くだしたような感じの人がいることが好感の持てないことの一つの理由になっている。その印象は、あるいは、中学の頃に会話をならつたイギリス人の教師の印象に結びついているのかも知れない。その人は、生徒たちに英語の名前——たとえば、トムとかジョンなどの名前をつけて呼んだ。本当の名前があるのになあ——とわれわれは憤慨したものである。その教師に道で会ってあいさつをして、愛想がなかった。そんな時、いやなやつだなあ——と思うことがしばしばあつた。それが、イギリス人に好感を持てないことの原因となつているとすれば、あまりに主観的すぎるかも知れないが、ロンドンにいる友人たちに会って話をきいた時にも、階級の区別の厳しきなどについて、たとえば、レストランにも何等級があつて、一々二等級のものには入れないのだなどときくと、やはり必ずしも主観ばかりでないという気がするのであつた。そのような気持で衛兵交替などを見ていると、全くのコメディのような気がして、衛兵がまじめな顔をすればするほど、思わずふき出したくなつたし、英国銀行の脇をシルクハットに山高帽をかぶ

ったいわゆる英国紳士が歩いていくのを見ると、ちょっといたずらをしてやりたい気にもなるのであった。そのようなことでこれまでの四回のヨーロッパの旅のうち、二回はイギリスを避けたのである。

今回のロンドンの訪問は、ひたすらに自閉症の研究のためであった。いくつかの出版物によって、ウィング博士夫妻の努力で、自閉症児のための教育と福祉とがよく実現されているらしいことを知って、その活動をつぶさに自分の目でみるとともに、重要な問題について討論をしたいと願っていた。出発に先立ちわが国にあるブリティッシュカウンシルを通じて、「モズレー病院」との連絡をとってもらい、その旨を伝えておいてもらった。もちろん、承知する旨の回答を得たので、今回のヨーロッパの旅の中で最もみのりの多いものとなることを予想し、勇躍してロンドンに渡ったのであった。

ロンドンのホテルにつくと、早速ブリティッシュカウンシルからの手紙があり、先ず事務所へ来るように時間が指定してあった。翌朝、その事務所へいってみると、あっちへいけ、こっちへいけ——といわれた上に、大分待たされて、事務員の女の人と会ったのである。ところが、その女の人から、モズレー病院ではあなたを案内するにふさわしい人が三人も休暇をとっていて、案内ができないので、次の機会にしてほしいと病院からいってきたと、伝えられた。せっかくロンドン（くんだり）まで来たのだから、

ぜひ見学だけでもさせて欲しいと懇願した。それをきいて女の人はもう一度交渉してみると、その返事はホテルの方へ送っておくということであったので、午前中いっぱいを無駄に送ってしまったことを歎きながら、午後を観光とした。夕方、ホテルにつくと、手紙が来ていた。見ると、結果は同じであり、最後に、次回にはぜひ立寄ってほしいと書かれていたのである。次回って、いつのことをいうのか！ 承諾があったから、遠路をロンドンに来たのに、次の機会と云って、そう簡単に来れるものではない——と思うと、腹が立ってきた。何ということだ！

そうなると、次々と腹が立つ。第一ホテルのサービスたるや、全くできていない。サービスではなく、管理に等しい。部屋の鍵の授受をするおじいさんがいて、外出から帰ってくると、そこで宿泊証を示して、その人から鍵をもらわなければならない。立てこむと、四五人の列を作るようになるのだが、私が間違つてカードを横にして出したら、いやな顔をして、「ネックスト（次の人）」といったのである。私をあどまわしにして、次の人を先にしたとは！ 次の人が女性であれば我慢をしたかも知れないが、若い男性であった。何ということか！

朝の食堂も、ボーイ長が日々支配した。一列に並び、ボーイ長の命ずる席へいってすわらなければならず、料理を運んでくるのも実に遅い。時間で外出しなければならない外人が、急いで食事を運んでくれるように頼んだが、肩をすくめてできないという。

そのような人が二人もいて、怒ったような顔をして、一人は食事をせずに、一人は時計を何回も見ながら、とうとうスープだけなので、あたふたと出ていってしまった。それでも、朝食はホテル代の中にふくまれているのである。サービスとは全くほど遠いものであり、一体どうしてこのような支配的な人間ができあがるのか、あきれた——というよりほかはない。このようなところにイギリス人の特性をみってしまうのは、偏見であろうか。第一回にロンドンに来た時はチバという製薬会社の小さい宿泊施設に無料で一〇日ほど泊めてもらったし、第二回の際にはパンションであった。ホテル住いは今回が初めてである。旅行案内にも二流どころのホテルとして紹介されているのに、このような状態であるとする、三流や四流のホテルは推して知るべし、ということになるのか、あるいはこのホテルのみがあきれた状態にあるのか——。

ホテルを一步でるとピカデリーサーカスに直面する。ここで私はビートルズとよばれる群を初めて見ることができたのは幸いであつた。新聞や雑誌などでその存在や姿態は知っていたが、目の前につぶさに見るのは初めてであつた。それ故、日本のビートルズも見たことがない。中央にある銅の碑をめぐって四〜五段の階段があるが、そこにぎっしりと詰まって腰をおろし、話をし合っている者もあれば、楽器をならしている者もあり、うつろな目で宙をみている者があり、生き生きと目を輝かしている者があり、その着ているもの、また異様であることは、一口では言い現わすこ

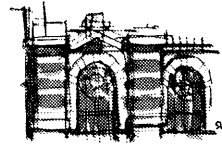
とができない。髪は長くたらしめて、男性とも女性とも区別のない者もあるが、わざわざ頭をきれいに剃ってはげを作っているものもあり、赤ん坊を抱いている女性もいた。この雑踏の中に、子どもをどうして連れてくるのだろう、誰の子なのだろう、この子が大きくなったら、どのようになるのだろうか——いろいろの思いが湧く。一日二回、市の清掃係の一人が来て、ホースで水をかけ、そのあたりを掃除する。その時ばかりは腰を下ろしてられないので、三々五々と散っていく。しかし、石が乾いてくる頃になると、どこからともなく現われてきて、同じようにビートルズの群ができるのであつた。

このような大群のビートルズを、ヨーロッパのほかの国々でみたことがない。一昨年パリーのセーヌ河畔で幾組かの少数の集団を高みからみたが、このピカデリーサーカスの人数は、非常なものであつた。いったい、どうしてこの土地に、このような者が集まってくるのであろうか——。紳士の国といわれていることに何か関係があるだろうか。恐らくいろいろと心理学者や社会学者による分析が行なわれているのであろうが、初めてこのような集団をヨーロッパの一隅で、しかもロンドンで見たとすることは、私にとつては非常な驚きでもあり、興味でもあり、たまたまホテルのすぐ前ということもあって、飽きずに見ることになった。

もう一つ、私が驚いたことは、このロンドンが、超ミニスカートの女性が多いということであつた。

北欧保育短信(五)

飯田泰造



目の目を見ない、とり残された階層として扱われているかをひしひしと感じましたし、また精神的にも、「子どもの天国」などといわれる陰で、いかに子どもの本性が見失われているかを考えずにはいられませんでした。

そこで先ず、こちらの国のよいところをできるだけ紹介しようとしてきたわけです。だがもちろん、その中に問題がないわけではありませんでした。

北欧の保育のお便りを終わるにあたって、これまでは見たままをただ紹介したに過ぎないようでしたから、まとめとして、私の感じたことや意見を書いておきたいと思えます。

これまで私の目は当然子どもに向けられてきました。が、それとともに、老人や身体障害者などにも目を止めてみると、ほんとうに福祉国家の人たちをうらやましく思う

とともに、日本の子どもを——現在多くの熱心な方々の努力にもかかわらず——とり残された階層としてとらえることが、いっそうはつきりしてきました。

この国々の幼稚園・保育園をはじめ、子どもたちのための各種の施設の行き届いていること、身体障害者や老人に対する温い保護にくらべてわが国のそれは、物的にも国民総生産の強大化云々の陰に何と小さく

例えば、すでに成長の過程で起こっているいろいろな子どもたちの好ましくない問題についても、幼児—少年期をとおしての教育のあり方に反省もできてはいます。

また、よくスウェーデンの社会保障制度を批判する材料に、老人の自殺者の多いことをあげて、あまりの優遇のせいだと申します。(このことは、日本は青年のそれが多いことを比較対象にして考え直さねばな

らぬことですが) そのような社会状況の両面をふまえて、ここの子どもの教育を見とおした時、いろいろなことを考えさせられたのです。

先ず、私たちは、子どもをとり残された階層でなくする努力を怠ってはならないということでした。このことは、少しく、その基本的な考え方を伝えておかなければならないと思います。

即ち——

ヨーロッパ人の合理精神を人間関係にあてはめていく時、それは、個人主義をとります。スウェーデンにおいて、それが最も徹底しているように思えます。いいかえらば、一人一人の人間の尊厳を認めていくということですから、家族制度の中で見ても、親と子どもの関係が、この一線で貫かれている故に、親は幼い子どもの基本的生活習慣というようなものを除いては

全く干渉をさけています。その考え方は、*「親(おとな)のもっている既成の概念や時代観というものと、子どもが将来においてもつであろうものとは、当然異ったものであるはずだから、自分たちの思わくをあてはめてしまうことは、子どもの将来にある可能性を台なしにしてしまうに違いない。」*というものでしょう。

今でこそ、日本でも次第に、また、急速に、若い世代はこの要求を出してきつつあり、それがまだ定着していないので、家族制度の中のギャップから、さまざまのトラブルや中年層の親たちのどうしていいか解らぬとまどいやあせりがそこから出てくるのも事実です。それが、ここでは、今にはじまったことでなく、長い間のくり返してすっかり定着し、明確に保持され、自然になつていくわけです。

そのような状況の中で、子どもは、誰に

もわずらわされずに思いや考えを拡大し、*「試行し、模索していきます。しかも自分の責任を感じつつ……。これは根本的にはまことに大切なことがらでありましようし、そこに自由ということがあり、主体的に自己を確立していくことができる場が、保証されるといえると思います。」*

このことは、私たちとしては、よくよくかみしめてみる必要を、今さらながら感じさせられました。

このような基本的関係のできている子どもたちを預かる幼児教育は、やはり家族の中でふんできた同一の軌跡をたどっています。それは当然のなりゆきであり、重要なことでしょう。特に造形活動のような創造性を推し進めていこうとする活動にとつては、大切なかまえでありますし、それをよく認識して、それを援護するてだとして環境を整備し、素材を用意する……それが

はスウェーデン流の富裕さや、その他の国で見た子どもたちへの愛情を背景にして、誠に多彩であるようにみられました。

ここでは、その努力を買い、アイデアをたくさん見せてもらって、参考になりました。

しかしながら、ただ環境設定が十分で、素材の配列が豊富であるだけで、果たしてそれ以上に創造的に更に一步を踏みだしていくだろうか、という疑問も生じてきたわけです。それは前述のようにあまりにも子どもをワクづけることへのコントロールから、少なくとも造形活動の場面で、それ以上のことを何もしていないか見たからであります。つまり後は子どもまかせでありました。ただフィンガーペインティングのぬりたくりであり、どろ粘土のいじくりであり、イーゼルに向かっておびただしい絵の具の浪費でありました。だが「そこに意

義がある」というのなら、それでよいと思います。各人のそこからでてくるものに期待するというかまえば誠に大切でありますから。

しかしその期待するものが、この幼児期においても内実しつづけていくものであったでしょうか。もちろん性急にその効果をおねらい、期待することは、大いなる誤りをおかすものであると知らねばなりません。それだからこそ、期待するものをより確実に期待できるようにしていかねばならないであろうし、漠然と「そうしておく」とよいらしい」というだけでなく、「そうにちがいない」という明確な自信がなければ、それは教育的かまえになってこないであります。そこに保育の弱さを見たのでした。では、それにはどうしたらよいか？というところに絵の指導のむずかしさもあり、特効薬とて見出せないものです。

そこで感じられたことは、いじくり、ぬりたくることももちろん大切なことながら、子どもの成長発達につれて、例えば、「試す」ことをしているその段階から、次にイメージを見出していく「想う」働きも自身も認められるような教師のとりあげ方やあげまじや見えない努力も必要でありましょう。

それが十分な環境を用意さえしてやれば必然的にそうになっていくというあり方では不十分であるとうけとれたのです。また、子どももそれに慣れてしまっているようでした。その考え方の奥には、やはり、私は「うっかりほめたりすることは、先生の概念のわくづけをするおそれがある」という制御意識が働いているように感じられたのです。

しかし日本のようすを思い起こしてみた

時、あまりにも対照的で、サービス満点、ほめたり、貼り出したり、助言をしてやったり、とてもにぎやかなありさまが浮んできました。そしてその心の中をのぞいてみると、やはり効果を期待している。しすぎているのではないでしょうか……。その教育効果(?)は現われ、子どもの絵は「巧く」なっていくとともに、内容がなくなりつまり全人格的な表現が影をひそめてしまふ……。どうもままならぬものだと思います。

この二者の間の整合が、一つの指導のメドのようにも思われました。

ある時、中学校の校庭で、休み時間に喫煙している何人かの生徒のそばを先生といっしょに通ったので、先生に「年少者の喫煙をどう考えるか？」とたずねますと、彼の返事は「これがスウェーディッシュデモ

クラシーだ」というものでした。そこで「明らかに害のあるものに対しても、それはよくないといつてやらないのか？」と反問しますと、「痛い目にあうのは自分でしょう。そして解るでしょう」というのです。

私には、これはどうも手おくれの感がしたものでした。もちろんこのことと絵などの指導とを結びつけようというのではありませんが、少なくとも子どものしたこと、よいものをよいといつてやるのが、愛情ではないかと思えますし、それをしないのは怠慢だと考えてもよいのではないのでしょうか。

私たちは怠慢でないために、なすべきことと、なすべからざることを明確に判別、把握する知恵と力を持ちたいものです。それは、学問が教えてくれるでしょうし、愛情もそれに加わらねばなりませんまい。

ここでも、それらのことが、積み重ねられて努力している施設には、やはり園全体に一致が見られたことでしたし、そのような園も見られたことは、大きな示唆を与えられました。それは創造的ふんい気といひなおすこともできると思います。

子どもの心性をそこねないように、そして全体的な子どもの幸せをもたらせる社会を打ちたてるために、保育者が多くの努力をしつづけなければならぬと思えます。それとともに、真の幸せをもたらすためには、一国だけの知恵や力だけでなく、いろいろな国、さまざまな考えを出しあい、励ましあつていくことは、今日、きわめて大切なことだと、深く感じさせられたことでした。

一九七〇年一月スウェーデンにて

問題行動の研究(三)

児 玉 省



今まで二回にわたって、幼少期から青年期にいたる児童の問題に関する内外の八つの研究または立場について述べてきたが本稿では、本問題に関する筆者自身の研究について述べ、次いで各研究について比較検討を試み、本問題についてなにかの方向性、未解決の問題に対するなんらかの回答が得られるかどうかを考察したいと思うものである。

H 児玉の研究(子どものしつけと性格、一九六九、その他)

筆者は幼児期から小学校高学年までの児童の問題行動を調査するために72項目から成るアンケートを作製し、東京都内および日光の幼児および児童約二〇〇〇名の親に対して記入を求めまたそのうち約六〇〇名の親については面接調査を行なった。

調査項目は、前述したマクファレン案を参照しながら多少改訂を加えて、次の五種類の問題角度から成るものである。

- イ、生物的機能関係(睡眠、食事、排泄など)
- ロ、運動習癖関係(チック、多動性、指をすう、爪をかむ、など)
- ハ、身体体質関係(アレルギー性、自家中毒症、自律神経系不調など、例えば、O・D症状など)
- ニ、社会的基準関係(よくけんかをする、お金を持ち出す、家出、放浪するなど)
- ホ、性格関係(はずかしがり、うたがい深い、嫉妬的、涙もろい、ぐずである、など)

児玉の研究(一) 問題行動と性格類型

アンケートの調査結果を因子分析にかけたところ、次のような五つの因子—五つの性格類型を見出すことができた。

1 強迫性不安の因子——繰り返し手を洗わぬと気がすまない、勉強のことが気になる、けがや病気が気になる、仕事がおそくてぐず、などを内容とするもので、こういう問題が結びついている不安定性格があることを考えることができる。

2 体質的過敏性の因子——ぜんそく、風邪をひき易い、自家中毒症にかかる、ジンマシンにかかり易い、しゃぶるくせ、などが結びついているもので、体質的過敏性を持ち合わせている性格の存在を示すものといえよう。

3 運動習癖の因子——どもる、しゃぶるくせ、爪や鉛筆をかむ、チック、不器用、仕事ぐず、注意散まん、親教師に反抗的、などをいっしょにしている性格像の存在が考えられる。

4 発達未熟の因子——泣き虫、しっしんにかかり易い、暗所・高所・とがったものを恐怖、注意散まん、親を独占したがる、ジンマシンにかかり易い、不器用、などをいっしょにした性格像で、結局、発達未熟な子ども姿である。

5 機能不安・反社会性因子——しゃぶるくせ、オナニー、ひんぱんに便所に行く、うそを平気という、金を持ち出す、などを特徴としているもので、反社会的性格像が身体機能に結びついていることを暗示するものである。

児玉の研究(二) 問題行動の展開

筆者はまた、幼児期の五歳から十一歳までの児童が示した問題行動の出現傾向をグラフにしたところ、38ページ(図1(1)~5))のようなグラフを得た。

このグラフにもとづいて、問題行動の年齢的变化・発達の展開の状況を考えてみると、生物的機能に関する問題群は、一応年齢とともに減少を示し、社会的基準関係の問題群も同様な傾向を示している。ただ両者とも十一歳のところまで減少を示してはいるが、そこで完全に清算されているわけではない。運動習癖関係は五歳から六歳にかけて減少するが、再び八歳頃上昇してピークをなし、その後十一歳にかけて減少する。ただ身体質関係のものは、五歳—十一歳にかけてほとんど増減なしで横に一直線のな継続を示している。

このグラフをみてとくに気がつくことは、運動習癖関係の問題行動と性格関係の問題行動がほとんど同一の消長を示していることである。推測されることは、この年齢のこの種の性格的な問題があるものは、運動習癖にも問題がある可能性が高いということである。このことは容易に常識的にも了解できるということである。

というのは、例えば、神経質で過敏なものにチックが、また

図 1—1 生物的機能関係

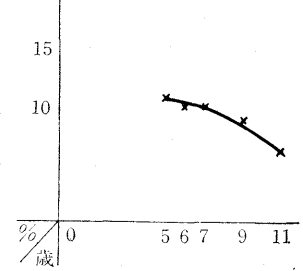


図 1—2 社会的基準関係

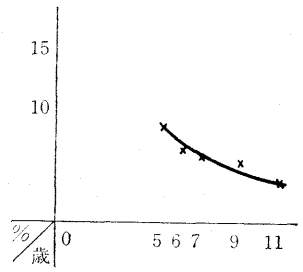
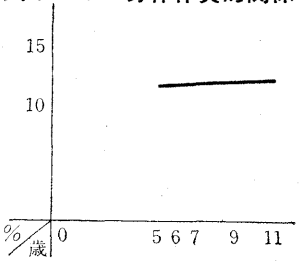


図 1—3 身体体質的關係



じゅんしているかに見えるが、さらに後段取上げることになる。また生物機能関係の問題行動が年齢とともに減少していることも常識的に考え得ることであって、夜尿や乳幼児期的な不眠などは成長とともに減少していることも周知の事実である。

図 1—4 運動習癖関係

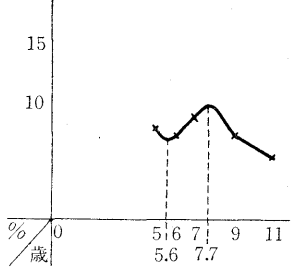
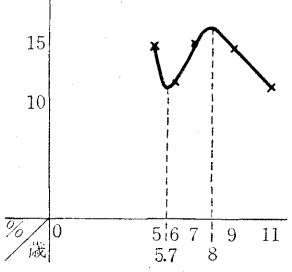


図 1—5 性格関係



社会的基準関係の問題行動も年齢とともに減っているが、これは多くの子どもにとってはいわゆる、ものわかりがよくなるにつれて、この種の問題行動は減少していると思うべきである。これに対して性格関係のものが消長なしに継続しているのは、性格の変化が必ずしも年齢の展開に伴って起こってはいないこと、ほかの問題行動に比べて変化が起こりにくいことを暗示しているものであろう。

児玉の研究(三) 幼少期から中学期への変化

前述した研究は、五歳から十一歳のところで切つてあるので幼少期の行動が青年期、とくに中学期になったときに、どういふ変化、どういふ運命をたどるかについての見通しを与えるものではなかった。そこで筆者はこの両時期を結びつけて、問題

逆にチックなどの問題の多いものに神経質で過敏なものが多いと考えられるからである。この点前述したラブウス教授がその研究結果に関連して指摘していること、すなわち、恐怖や不安度の高い児童が、そうでない子どもに比べてより多くいわゆる緊張現象、夜尿、どもり、かんしゃく発作、チックなどを持ち合わせていることを証明できなかった、と述べていることはむ

行動がいかに変動するかを見るために、次のような研究を行なった。

まず幼少期的なアンケートの内容を分析してそれが中学期に進むにつれて、いかなる形をとるようになるか、また中学期頃には幼少期にはみられなかったいかなる問題行動の角度が発現する可能性があるかを仮定して、青年期的な問題行動のアンケートを作製した。そして、大阪の某中学生男女各約一〇〇名に對してこのアンケート調査を施行し、同時に幼少期用のアンケートをその親に記入を求めて、この子どもと親の記入を比較して問題行動の幼少期から中学期への変動展開の検討を試みた。もちろんこの親と子どもによる別々のアンケートの記入を比較する方法には方法論上の問題があることはよく承知しているのであるが、現在、まず手はじめ的なテクニックとしてこういう方法に頼らざるを得なかった。以下幼少期的なアンケート項目に對してこれに對応して作製した青年期的なアンケートの内容がいかなるものであったかを示す。

なおこの二つの時期の対応関係を検討するためには、幼少期のアンケート項目を攻撃性、衝動性、不安及び過敏性等の角度に分け、不安はまた特定のものに對する恐怖、強迫性その他漠然とした不安などに分けた。

★表一 攻撃性、例

幼 少 期	青 年 期
かみついたり、傷つけたりする。 すぐ腕力に訴えてけんかする いうことをきかないで、すぐ 反抗したがる。 おこると手当り次第、ものを こわす。 よく告げ口をする。 よく意地悪やいやがらせをす る。 動物を傷つけたり、ふみつけ たりする。	思っていることをぜったい押し通したい。 他人が何かしているのをよく じゃまをしてやりたくなる。 親や上役に對してもおこりたくなる。 人をからかうのがすきだ。 役に立たないものは、なぐつてもいい。 私は動物をいじめる。 私は誰かを傷つけてやりたい気がする。

幼少期と青年期の攻撃性項目で直接、同じ角度で対応しているものもあるが、それは数少ないのであって、あとは、攻撃性という態度において対応するように構成した。その理由は、例えば、幼少期においては、腕力に訴えていたものが青年期においてもすぐ腕力に訴えるというように翻訳できるとは考えられないからである。

★表二 不安性、例

幼 少 期	青 年 期
<p>人と話をする時、あがってし どもどもになる。 高いところへのぼるとひどく こわがる。(高所恐怖) 必要以上に持物を整とんしな いと気がすまない。(強迫性 不安) 集中ができなくて気が散る。 親がいなくなるのではないか と不安になる。(分離不安) 知らない人の前に出るとひど く恥しがる。 必要以上にけがや病気の心配 をする。 繰り返し手を洗わないと気が すまない。(強迫性不安) いつも学校や勉強のことが気 になる。</p>	<p>自信がないので、なんでも思 いきってやれない。 読書や仕事の時、気が散る。 危険なところや不安なことに であうと、よくしりごみをす る。 人前で赤面しないかと気にな る。 心配になったり恐ろしいこと があると、よく下痢をする。 よく神経がばらばらになりそ うである。 たいしたことでもないのによ く気になる。 一つのことをよくよく考える たちである。 鋭い刃物などみると恐ろしく なる。(強迫性不安) 高い所に上るとすぐ目がくら む。(高所恐怖) 一つのことを気になると、ど うしてもそれからぬけられな い。(強迫性) 人に比べてこわがりの方であ る。</p>

不安性についても、幼少期的な角度がそのまま継続するものがあるが、同時に幼少期にはなかつたような角度が、展開していると考えらるべきである。また幼少期的な角度が、青年期には清算されたり、または青年期に使用するには不適當になる項目がある。

このようにして、幼少期と青年期を対応比較するために使用した角度は、攻撃性、衝動性、不安(特定事物に対する不安、強迫性不安、自己不安、身体的不安、家庭不安、対人関係不安及び漠然不安などを含む)および過敏性などの角度があつたがこれらの角度が幼少期から青年期へといかに変化または展開をしたかを示すために、次に、三つの表を示すことにする。

41ページの表3は男児(15名)(表3-1) 女児(15名)(表3-2)を含めて、幼少期から中学期へと問題行動出現傾向を、親が記入したものとその子どもの中学生自身が記入したものを比較して示す例である。幼少期にある斜線は、幼少期においては出現していなかつたことを示し、中学期の+(プラス)符号は中学期において新たに出現し、または拡大された角度を示し、-(マイナス)符号は幼少期においては出現していても中学期において消滅したことを示すものである。また最下段の最高値というのはアンケート中に挿入してある該当項目総数を示すものである。

表3-1 幼少期から中学期へ問題行動の変化(1)

B(男児)例

対象No.	幼 少 期						中 学 期						
	攻撃性	衝動性	特定恐怖	一般不安	強迫性	過敏性	攻撃性	衝動性	特定恐怖	一般不安	強迫性	内向性	過敏性
204	/	/	1	8	/	10	+13	+3	-0	13	+3	0	3
206	1	/	/	4	/	4	9	+2	+1	6	+1	1	2
207	/	/	/	/	2	/	+11	+11	+1	+13	4	3	+7
208	/	/	1	1	/	1	+12	+9	1	17	+4	2	4
209	1	/	/	3	/	3	5	+9	+2	10	+1	2	3
211	2	/	/	2	/	1	8	+4	+4	20	+3	2	7
212	/	/	/	/	/	/	+8	+6	0	+19	+5	2	+5
213	/	/	/	4	/	4	+7	+8	+1	10	+4	0	4
214	/	/	1	1	/	3	+6	+8	3	24	3	2	5
215	/	/	/	2	1	/	+10	+4	+1	15	-0	2	+5
216	2	1	1	2	2	5	6	7	3	18	3	0	5
217	1	/	/	2	/	/	12	+7	+3	11	+2	2	+5
218	/	/	/	1	/	2	+8	+2	+2	6	+1	3	3
219	/	/	/	4	/	5	+11	+8	+1	13	+2	4	3
220	/	/	/	1	/	5	+13	+5	+1	7	+2	2	6
最高値	10	2	3	14	4	16	17	12	4	31	6	4	17

表3-2

G女(児)例

対象No.	幼 少 期						中 学 期						
	攻撃性	衝動性	特定恐怖	一般不安	強迫性	過敏性	攻撃性	衝動性	特定恐怖	一般不安	強迫性	内向性	過敏性
242	1	/	/	2	/	5	5	+4	+2	5	+5	3	4
243	/	/	/	/	/	1	+10	+10	+3	+25	+5	1	9
244	1	/	/	2	/	2	12	+11	+1	23	+5	3	7
245	/	/	/	/	/	1	+5	+6	+2	+11	+3	1	9
246	/	/	/	3	1	6	+8	+9	+1	20	2	1	7
247	/	/	/	4	2	1	+5	+6	+2	12	3	2	3
248	/	/	/	8	/	3	+3	+8	+3	19	+3	0	6
249	/	/	1	2	/	3	+3	+5	3	16	+4	3	7
250	/	/	1	2	1	3	+8	+4	2	14	2	4	6
330	1	1	/	10	3	5	4	8	+1	20	2	0	11
331	/	/	/	3	/	3	+6	+4	+1	13	+3	0	7
332	/	/	/	2	/	1	+4	+4	+2	11	+1	4	1
333	/	1	/	1	/	3	+8	9	+2	12	+2	2	3
334	1	1	1	5	1	6	8	4	-0	8	3	3	5
335	/	/	1	5	1	3	+3	+5	2	10	4	0	6
最高値	10	2	3	14	4	16	17	12	4	31	6	4	17

図2 幼少期から中学期へ問題行動の変化(2)

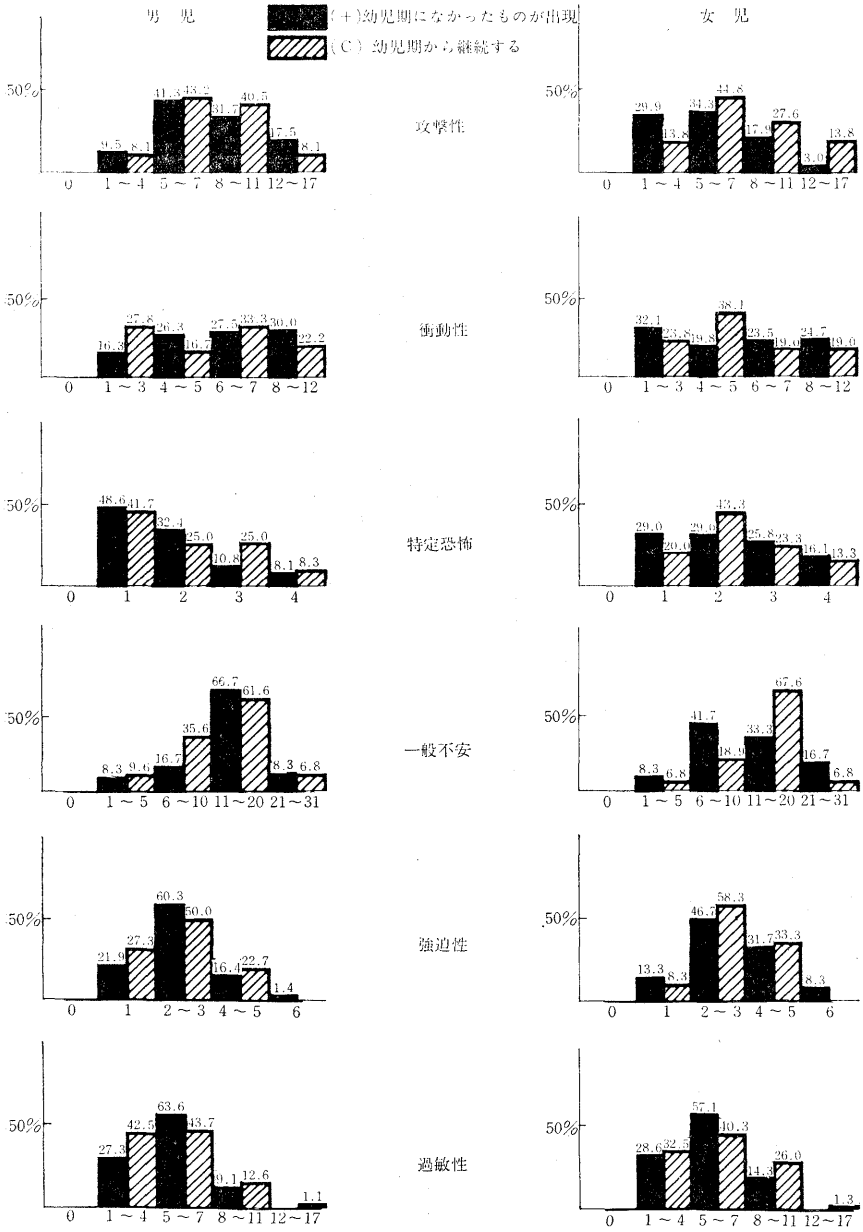


表4 幼少期から青年期へ問題行動の変化 (3)
 —— 中学期の状態 ——

			男 児					女 児					男 児 100名	女 児 87名	
			1	2	3	4	5	1	2	3	4	5			
攻撃性	問 題 数		0	1~4	5~7	8~11	12~17	0	1~4	5~7	8~11	12~17	+	63(63%)	57(65.5)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	6	26	20	11	0	20	23	12	2	C	37(37)	30(34.5)
		割合		(9.5)	(41.3)	(31.7)	(17.5)		(29.9)	34.3	(17.9)	(3.0)			
	幼児期から継続する(C)	人数	0	3	16	15	3	0	4	13	8	4	-	0	0
	割合		(8.1)	(43.2)	(40.5)	(8.1)		(13.8)	(44.8)	(27.6)	(13.8)				
衝動性	問 題 数		0	1~3	4~5	6~7	8~12	0	1~3	4~5	6~7	8~12	+	81(81)	64(73.6)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	13	21	22	24	0	26	16	19	20	C	18(18)	23(26.4)
		割合		(16.3)	(26.3)	(27.5)	(30.0)		(32.1)	(19.8)	(23.5)	(24.7)			
	幼児期から継続する(C)	人数	1	5	3	6	4	2	5	8	4	4	-	1	0
	割合		(27.8)	(16.7)	(33.3)	(22.2)		(23.8)	(38.1)	(19.0)	(19.0)				
特定恐怖	問 題 数		0	1	2	3	4	0	1	2	3	4	+	44(44)	51(58.6)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	18	12	4	3	0	9	9	8	5	C	42(42)	32(36.8)
		割合		(48.6)	(32.4)	(10.8)	(8.1)		(29.0)	(29.0)	(25.8)	(16.1)			
	幼児期から継続する(C)	人数	17	10	6	6	2	4	6	13	7	4	-	14(14)	4(4.6)
	割合		(41.7)	(25.0)	(25.0)	(8.3)		(20.0)	(43.3)	(23.3)	(13.3)				
一般不安	問 題 数		0	1~5	6~10	11~20	21~31	0	1~5	6~10	11~20	21~31	+	16(16)	12(13.8)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	1	2	8	1	0	1	5	4	2	C	84(84)	75(86.2)
		割合		(8.3)	(16.7)	66.7	(8.3)		(8.3)	(41.7)	(33.3)	(16.7)			
	幼児期から継続する(C)	人数	0	7	26	45	5	0	5	14	50	5	-	0	0
	割合		(9.6)	(35.6)	(61.6)	(6.8)		(6.8)	(18.9)	(67.6)	(6.8)				
強迫性	問 題 数		0	1	2~3	4~5	6	0	1	2~3	4~5	6	+	72(72)	60(69.0)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	16	44	12	1	0	8	28	19	5	C	25(25)	27(31.0)
		割合		(21.9)	(60.3)	(16.4)	(1.4)		(13.3)	(46.7)	(31.7)	(8.3)			
	幼児期から継続する(C)	人数	2	6	11	5	0	3	2	14	8	0	-	3(3)	0
	割合		(27.3)	(50.0)	(22.7)		(8.3)	(58.3)	(33.3)						
過敏性	問 題 数		0	1~4	5~7	8~11	12~17	0	1~4	5~7	8~11	12~17	+	11(11)	7(8.0)
	幼児期になかったものが出現(+)	人数	0	3	7	1	0	0	2	4	1	0	C	87(87)	77(88.5)
		割合		(27.3)	(63.6)	(9.1)		(28.6)	(57.1)	(14.3)					
	幼児期から継続する(C)	人数	0	37	38	11	1	0	25	31	20	1	-	2(2)	3(3.4)
	割合		(42.5)	(43.7)	(12.6)	(1.1)		(32.5)	(40.3)	(26.0)	(1.3)				

↓
 幼児期0で中学期0の人数

42 ページの図2のグラフは、同じく幼少期から中学期へと問題行動の発現状態の変化を示したものである。問題項目数をいづれも五段階に分けて、その幼少期から中学期へと変化した項目数分布とそのパーセントが示されている。黒棒は中学期になって新たに出現または展開した項目数のパーセント、斜線棒は幼少期から中学期へと変化なく継続している項目数のパーセントである。

43 ページの表4は図2のグラフの数値を表示したもので、ブラスの方が角度と項目数(段階別)の増大したものの、Cの方はもとのままで継続しているものを示し、右端の数字は、攻撃性、衝動性、不安その他について幼少期から中学期へと全項目数を通じて増大の傾向を示した児童数とそのパーセントを示すものである。またマイナス符号のものは減少傾向を示した児童数とそのパーセントである。

以上の表やグラフを見ると、攻撃性については中学期になって新たな攻撃傾向や角度を獲得したものが男児63%、女児も65%、幼少期からの継続が各々37%及び34%であって、減少または消滅したものはない。一般不安については、男女児とも約85%の者が幼少期からの不安傾向を継続しており、新たな傾向を示した者は少ない。このことは過敏性についても大体同様である。特定恐怖では約半数のものが新たな恐怖を獲得し、強迫性

については、男女児とも約70%のものが、新たな強迫性を身につけている。これに対して、中学期になって、消滅または減少を示したものは極めて少ないことが示されている。

この児玉の研究(三)は、児玉の研究(一)と比較対照してみると、両者の間に密接な関連があるとは思われない。ある意味では両者はちがった傾向を暗示しているようにさえ思われるのである。すなわち(一)の方では、問題行動は、性格関係のものを除いて減少の傾向をたどっているかに見えたのであるが、この(三)の研究では、減少どころかむしろ増大の傾向をさえ示すかに見えるのである。これをいかに考うべきか?について、後段さらにふれることにしよう。

むすび

問題行動の意味とその展開について検討すべく内外のいくつかの研究をとり上げ、かつ自分自身も多少の研究を試みて、問題の追究を試みたのであったが、その遍歴の果ては結局またまた未解決の振り出しにもどったような印象である。ただし、この探求のあいだに多少明かになったことがある。いまこのまじめにおいては、取り上げた諸々の立場を比較的に考察しながら、多少明かになった点を取り上げて問題提起としたい。

(1) 児童の問題行動について、その内容の点では、ほとんどの研究の間で一致があるといえよう。ただし日本精神医学者（とくに児童精神医学者）は、三人とも、神経症の系列においてこれをとらえようとしている。

高木は神経症を、「欲求不満や葛藤などによって心理的防衛機制に破たんを生じ、精神や身体の働きに障害が起り、社会生活を円満におくれなくなった状態」と定義し、ただし小児の場合は、とくに若幼児においては、心理的機制が未熟で自ら悩むことが少ないし、かつ小児では精神と身体が成人の場合よりも密接に結びついているので、身体症状を主とする神経症の形をとり易い、そして小児の場合は、神経症前状態または不全型神経症というべきものが多い、と述べている。

牧田も同様に筆者のいう問題行動をすべて神経症的な発症として取扱ひ、岩波は小児にもはっきり神経症が存在するが、しかし多くは、日常生活の面で身体的悪癖として自律神経と関連をもった症状として考えられるものである。そして「情緒的な問題とともに、自律神経が大きく関与した身体症状と行動異常が乳幼児の神経症の主体であると考えたい」と述べている。

これはいずれも成人の神経症とはちがうが、神経症的系譜で考えているものと思われる。これに対して、米國精神医学の立場は「一過性的なものよりは長続きするし、かつ治療しにくい

ものであるが、精神病や神経症などのように重症のものではないもの」と定義している。すなわち一過性的なもの、重症なものの中間的なものと考えているようである。

第三の立場は、ラブウス博士の立場で、「児童における逸脱的行動は学齡児においては一時的な発達の現象として出現する」というものである。もう少しはっきりいうと、正常児における一過性的な発現ではないか？と問いかけているのである。

マクファレンの立場は、その書物の題名が示すように、「正常児における問題行動」と見なしている。ラブウスの立場をいっそうはっきりしたものである。

(2) 問題行動の発現や所在を、児童の性格類型に結びつけている研究者がある。ハーヴァド大学のカーズレイ博士、マクファレンらがこれに属する。もし性格の発現であるとすれば、問題行動の発現または発生は比較的安定している、可能性があるのではないか？という問題が起こってくる。筆者の研究(二)はこの問題を取り扱ったものである。

(3) 幼少期の問題行動は、その後、青年期まで継続するかどうか？ マクファレンの研究は二十二ヵ月から十四歳までの追跡研究であるが、極めて大ざっぱないい方をすると、十四歳まで

に大かた清算されているものと、十四歳でまだ残存しているものである。そして、性格的なものは、不定であつて、かつ、十四歳でまだ残存しているものが多い。これに対して生物学的機能関係のものは、年齢とともに消滅していく傾向がある。筆者の研究もこれと大差ない傾向を示している。ただ研究対象の最終年齢時にいつも、少数ながら問題を持っているものが残っているのを注目すべきである。

(4) 筆者の研究がこれらの問題に対して回答を与え得るものではないことは明かであるが、自分の研究をも考慮に入れて、筆者の見解を述べたいと思う。

1、幼少期の問題行動を全部神経症的なものと思ふことが必要であるか、どうか？ 筆者はマクファレン、ラブウスなどとともに、児童の問題行動の一部分あるいは大部分は、発達における一過性的現象である。または一過性的ではないとしても未発達・未熟の表現であると思ふたい。

2、ただし問題行動の種類によって、発達とともに消滅し易いものとそうでないものがあることが明かである。従つて児童の問題行動の将来を考へる場合、その種類とその性質を考へることが必要である。

いかなる種類があるかということは、立場によつて見方がち

がうが、一応生物機能的なものは発達とともにだんだん消滅していく可能性があり、體質的過敏性のものはずっと継続する傾向があり、運動習癖関係のものは筆者の研究(一)では性格関係の問題と同じような変化のコースをたどっているが、しかし、筆者の研究(三)が示すように、性格関係のものは、その後中学期になつても依然相当残留しているどころではなく、むしろ増大させしているかに見える。これは児童の発達の経路から考へて当然予期すべきことのようなのである。ただ運動習癖の方はその後も残るが、減少して残ると考へたらいいのではないかと思ふ。

社会基準関係のものも、年齢の増加とともに減少、または消滅していくものが多い。このことはこれらの問題が発達的な問題であることを示すものであるが、しかし、一部分のものにはずっと後まで続くと思ふのが適當であらう。

右に述べたことは、もし、それらの傾向が性格的類型としてすでに固まっている場合には、後まで継続する可能性が多いと考へべきである。この点については筆者の研究のほか、マクファレン及び米国精神医学会、並びにカースレイの研究などを参照していただきたい。

最後に、研究は決して問題の解決に向かつて、大した進展を示さなかつた。ただ問題を明かにするのにならぬに多少役に立つだらうと願う次第である。

保育の中の絵本



緑

幼児期は本―絵本―と「出あう」時期である。この時期に、良い絵本を与えることによって、子どもが本と「じょうずな出会い」ができたら良いと考えてきた。最近では、絵本もかなり多くの種類、数が出版されている。その内容も良心的なものが増えているのは嬉しいことである。

森

私の幼稚園の保育室にある図鑑、童話等の絵本は子どもが好きに読んでいるが、その他に母親を対象に絵本等の貸し出しをしている。比較的教育熱心な地区であり、絵本に対する関心もどちらかという和高い方である。しかし昨年度、特に気にかかった傾向として、身体を動かして遊ぶ活動は好きだが、絵本等にあまり興味を示さず、自分から本を読もうとしないことも、絵本の見方をあまり知らず、ただページをめくってすぐに本を変えたがる子ども、絵本の扱い方の乱暴な子ども等が目立ったことである。

毎日の保育の中に、教育要領「言語」の活

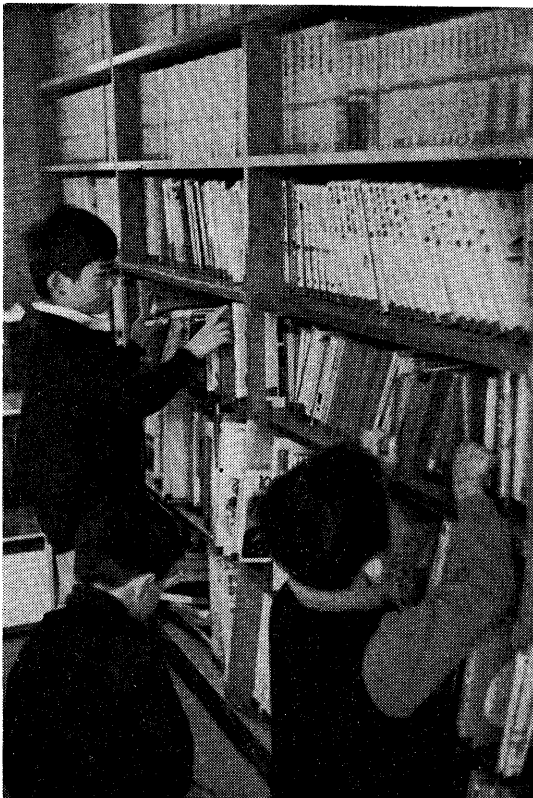
動の一部として、おはなし（童話の専門の先生による一週一度、二十〜三十分のもの） 紙芝居、絵本をとり入れてはきたが、年長組の一年間、他の活動と共に、絵本を使用した活動を積極的にもつことを計画し、次のように行なった。

四、五月は主に保育室にある絵本（福音館書店発行、ぐりとぐら、ぐるんぱのようちえん、のろまなろーらー、だるまちゃんとしてんぐちゃん、そらいろのたね等）をほとんど毎日帰りの時間の前のひとときに読んで聞かせたり、皆で絵をかいてお話を作って遊んだ。続けて絵本を読んで聞かせていると、今まで、図鑑のような本ばかり見ていた子どもが童話の本を広げたり、あまり絵本を手にしないうちが本を開くようすが見られた。一度読んだ本は翌日から必ず誰かが手にしていた。本の扱い方もだいぶ馴れてきたので六月に入って図書室を利用することにした。

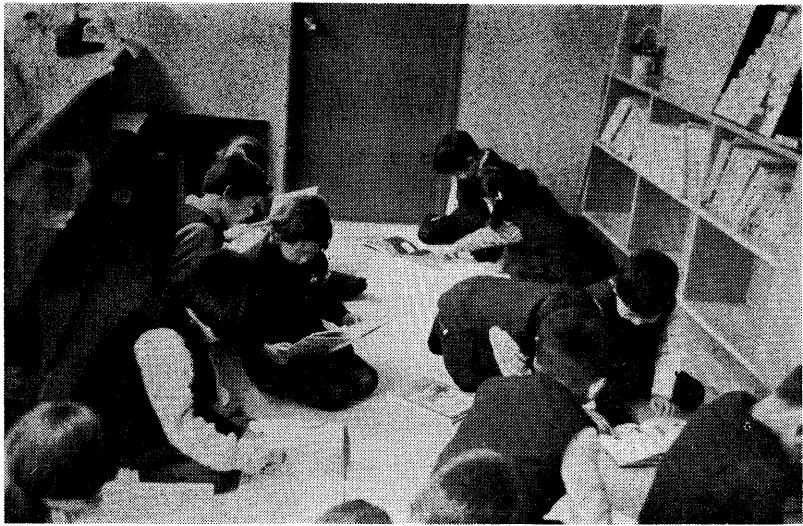
図書室は昨年二月に幼稚園の十五周年記念に完成した。本は以前から廊下等を利用した図書コーナーで貸し出していた。図書室の完成で蔵書もふえ、児童図書は一〇〇冊以上になった。本の選択は

各方面からの推薦書（かつら文庫、良い本のリスト、小学校、新聞、その他）をもとに、図書係の母親と職員が相談した上、実際に調べて購入している。

はじめ図書室に入った時は本がたくさんあるのに驚き、やや緊張気味であった。図書室にどんな本が並んでいるか、保育者とい



どの本にしようかな

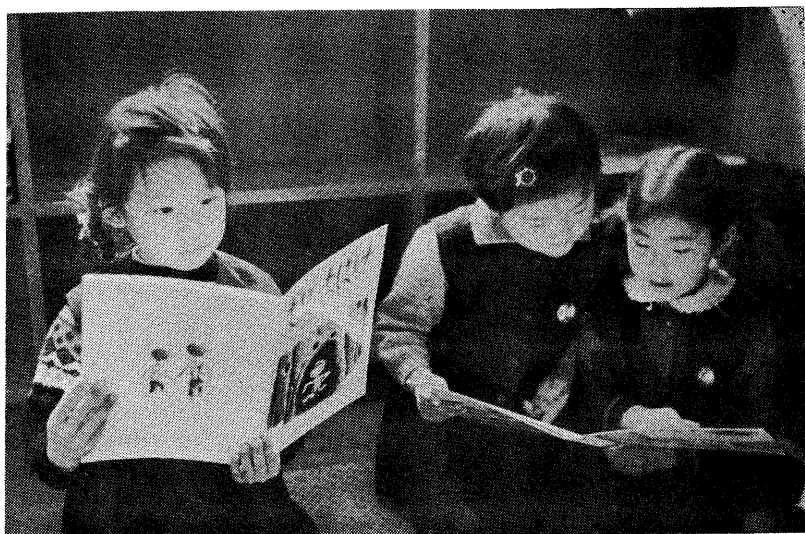


自分の好きな本を読んでいる

っしょに見学した。自分の持っている絵本、あるいは、以前借りたことのある絵本などが出て来ると大喜びであった。第二回目は、本を読む前に手を洗う、本のページをめくる時折らない…など、本の扱い方を中心という具合に、一学期は絵本、図書室に親しむようにした。また利用した日は、図書室の中で絵本を読んで聞かせたが、それがまた楽しみでもあったようだ。

二学期は、運動会、展示会等の行事が一段落した十一月、再び図書室を利用した。今回は子ども自身がだいぶ積極的になり、本の選択も結構考えているようだった。選ぶ理由は、「先生が読んでくれたから」「ママが借りてきてくれたことがある」「この本好きなんだ」等々だが、字を読めるようになった子どもがふえてきて、どの程度消化しているかは問題だが、シリーズものを次々読んでいく子ども、まだ読んだことのない本をさがしては、読んでいく子ども、前回は、もう「次はこの本」と決めていく子どももいる。

絵本の読み方には、絵の多いものから、やや厚い字の多いものを夢中になって読む子ども、字を拾うことを楽しんでいる子ども、絵を楽しんでいる子ども、自分の手にしているものより他の子どもの持つ本を横から見ている子どももいる。あまり集中しない子どもには、保育者が読んで聞かせるようにして……というよ



ひとりで読んだり、友だちと読んだり

うに、回を重ねていくうち、だいぶ落ちついて絵本を見るようになってきて、図書室に行く日を楽しみに待つようになり、保育室の絵本も、だいぶ手にするようになった。この頃から、母親が本を借りていく時に、読みたい絵本を注文したり、いっしょに図書室に入って自分で選ぶ光景も見受けられた。

三学期に入って、図書カードを利用してみた。本の後のページに入っている図書カードに保育者が名前を書き、子どもはカード入れにそのカードを入れてから本を読み、読み終わったらまたカードを戻して、本をしまうというやり方で、これは小学生になってからも自分で本を借りに来られるように指導したのである。

一年間の図書室の利用は地味な活動であるが、余程おもしろかったらしく、いっしょに本を作ったり、三月のおわかれ子ども会で「もりのとしょかん」という題のげきあそびに発展した。また、降園の前、食事の後などに読んでいた本も、やや長い話、少しスリルのある話を聞くのが楽しみになってきた。絵を中心とした本から、物語の内容そのものを楽しむ、あるいはいろいろな自分なりに想像することを喜ぶ時期に入ってきたのであろう。そしてこれから先、本の楽しさがわかる時期に入るものと思われる。

一年間をふり返ってみて、絵本に対して関心のうすかった子どもで、子ども自身の発達といろいろな絵本にふれる機会を持った

ということ、不十分なながらも絵本に興味をもつようになった子どもがふえたように思う。そして本の好きな子どももいっそう読むようになった。体験談にとどまるかもしれないが、絵本を使用した指導も他の教材同様、毎日の積み重ねの効果が大きいように思われる。

絵本は、子どもの情操を高め、いろいろの経験がまだ浅い子どもの想像力を増すのに役立つ。また、言語の発達面からも大切な教材である。しかも、子どもが自分で好きな絵本を自由に見ることがができる。それだけに絵本の選択には配慮すべき点が多い。話の展開が明瞭でわかりやすいこと、子どもにわかることばで簡潔な文章、絵、内容に夢のあること、その他装丁などを検討して、年齢にあった内容の充実した良い本を揃えることが大切である。なお、絵本の好みの傾向、読書力は個人差も大きいので、できれば絵本の種類、内容に幅を持たせた方が良いと思う。絵本を保育者も子どもといっしょに聞くふんい気を作る、どの子どもも絵本を見る時間を設けるようにすることも、かなり絵本に興味を持つのではないかと思われる。

なお幼稚園で扱うのであるから、学校のいわゆる読書指導というより遊びの中で絵本とふれあうことの楽しさを知り、子ども自身が自分の活動として生活の中にとり入れて、感受性豊かな想像



自分の読む本のカードをカード入れにしまう

力のある本の好きな子どもになってほしいと考えるのである。最後に子どもたちの好きな本をあげてみる。

たろうのおでかけ、もぐらとずぼん、かわ、ゆうちゃんのミキサー車、てつたくんのじどうしゃ、ちびくろさんぼ、ひとまねこぎる、ひとまねこぎるびょういんへいく、きんいろのしか、だいくとおにろく、ピカくんめをまわす、おそばのくきはなぜあかい、どろんこハリィ、ちいさいおうち、ろけつとこぎる、きかんしゃやえもん、ゆきのひ、なぜなぜ文庫、こども百科、えほん百科、かがくのとも。

(泉幼稚園)

日本幼稚園協会主催

幼児教育講習会

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会

本講習会を例年のように開催いたします。本年も昨年と同様に、第二部（午後の部）は、お茶の水女子大学体育館で実習を主として行ないます。第二部については、混雑を避けるために、会員を前半の二日間（前半の部）、後半の二日間（後半の部）に分けて、それぞれ人数を制限することになりました。ご了承の上、ご参加ください。

二十四日「星の王子さまと現代」

昭和女子大学教授

内藤 濯

二十五日「現代の幼児教育」

お茶の水女子大学教授

同附属幼稚園長

周郷 博

第一部 午前の部（九、三〇～一二、〇〇）講演

会期 昭和四十五年七月二十二日（水）～二十五日（土）

会場 お茶の水女子大学講堂

内容 七月二十二日「数学者からみた現代の教育」

東京工業大学教授

遠山 啓

二十三日「詩のこころ」

詩人

吉田 一穂

第二部 午後の部（一、〇〇～四、三〇）音楽リズム実技

会期 前半の部 七月二十二日（水）二十三日（木）の二日間

定員 八〇〇名

後半の部 七月二十四日（金）二十五日（土）の二日間

定員 八〇〇名

会場 お茶の水女子大学体育館

内容 たのしい幼児の遊び

お茶の水女子大学・附属幼稚園関係教官

会 費 第一部 八〇〇円

第二部 八〇〇円(テキスト代を含む)

なお前半の部と後半の部とは同一内容です。

会費は当日会員証(復のはがき)をそえてお払い込み下さい。

申込期限 六月十五日付の消印分より受付開始(それ以前の

申し込みはおことわりします)但し各部とも定員になり次第締切らせていただきます。

申込方法 宛名 お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係

東京都文京区大塚二一一一(☎一一二)

方法 お一人につき往復はがき一枚を左の様式にしたが

って記入し、復信の表に返信先の園名と個人名と郵便

番号を書いて

申し込み

下さい。

・第一部参加

希望の方は、

④にその旨お

書き下さい。

(往信の裏面)

①	氏名	
②	勤務園名	
③	同所在地	郵便番号
④	参加希望	
	・第一部	
	・第二部	
	前半の部	第 希望
	後半の部	第 希望
(注)	はがきをたてにして、	
	ヨコガキ	

・第二部参加希望の方は、④に前半の部、後半の部いずれを

第一希望、第二希望とするかを明記して下さい。

・第二部については、申し込みが定員に達した場合は申し込み

順に会員を決定して締切ります。また人員の都合で、第

二希望におまわしすることがあります。

・復のはがきの裏面にこちらで会員証を印刷しておとどけし

ます。定員に達した以後の方にはその旨ご通知いたしま

す。従って、復のはがきの裏面には何もお書きにならない

下さい。

・第一部、第二部とも当日の申し込みはお受けできませんの

でご了承下さい。

(注意) ・第二部受講の方は、運動に適した服装・靴をご用

意下さい。

・電話での申し込みはおことわりいたします。

宿泊 ご希望の方は七月十五日までに下記へ直接申し込み

下さい。(二食付一泊一、六〇〇円程度)

つる家ホテル 東京都新宿区下宮比町一三(国電飯田橋駅

東口)電話東京(三六〇) 三三六六～三三六九

子どもの発案によるあそび

(1)



三 歳 児——一学期

田 中 都 慈 子

ま え が き

子どもたちが、自分たちで考えてはじめたあそびが次々に発展し、それが長期間続く時、一体何がそんなに子どもたちの気をひくのか、何が興味をおこさせるものなのか、と思う。

毎日、新しいアイデアが生まれ、あるものは、どんどん発展し、またあるものは、その場で消えてしまう。ちょっとした助言の言葉から、発展することも多い。一年間三歳児十六名(男十一名、女五名)のさかんな創作活動を見て、どんな過程を経て、あそびが発展したのか、どんなあそびがどの位続いたか、に興味をもった。そこで、学期ごとにくぎって主な活動を順にあげ、一年間の製作活動を含めての子どもたちが考え出したあそびをふりかえってみたいと思う。

「私たちは、子どもが恐れをもたず、自信をもって、人間として自由に自分自身を表現することにより、満足感を見出すことができるように助力してやらなければならない」(K・H・リード著「幼稚園」P・390)と、K・H・リードのいうように、子どもの創造的活動をのびのびと十分にのばすためには、継続的にできる時間を与えてやらなければならない。そしてある程度自由に使える材料を準備しておく必要がある。創造的活動によって、子どもたちは、自分たちのもつ欲求を満たすことができ、満足感を得る。意欲をもって物事にあたることは、さまざまな可能性をひき出す。毎日の生活の中で、たくさん経験することにより、いろいろな面での発展がみられる。

現代のように、現実的な考えが多い中で、幼児の間だけでも、夢の多い、想像の世界を知ってほしいと思う。月に兎が住んでい

ないことのわかった今でも、やはり、なつかしい昔話を信じ、親しんでほしいものである。数字や字をかいたり読んだりすることよりもまず、楽しく遊ぶことのできる子どもになってほしいものだと思う。

一 学期 (四月～七月)

こどものようす

四月初旬は、泣いてあそべなかった子どもも四月中に落ちつき、絵本を読んでもらったり、積木、ブロックなどからあそびに入れるようになり、五月には、落ちついて思い思いにあそべるようになる。製作活動もさかんになり、熱中して材料ととりくむ子どももでてきた。六、七月は、戸外あそびもさかんで、水あそび、砂場あそび、園庭での虫とりなどが、多く行なわれた。以下、子どもから生まれた活動を、行なわれた順にあげる。

あそびの発展

(1) 椅子を使つての汽車あそび

椅子をいくつも続けて長くし、先頭は、椅子をひっくりかえして、椅子の脚にブロックをはめ、運転台にする。このあそびは、食堂車、救急車などに発展する。机をどけて、部屋を広く使えるようにしておく、部屋中の椅子を使い、長い汽車ができ、ピアノをひくとリズムあそびにも発展した。一学期の間に全員の子ど

もが、この汽車あそびに参加した。

(2) ブロックのピストル (図一)

ペアーブロックで、ピストルをつくる。形と色の組み合わせが、決まっているところがおもしろい。

制帽のゴムを上でとめ、カウボーイハットのようにかぶり、ピストルをもってあそぶようになる。

(3) ブロックを使つてのボーリング

ペアーブロックをテラスに並べ、それをピンにして、ボールをころがし、ブロックを倒すあそび。

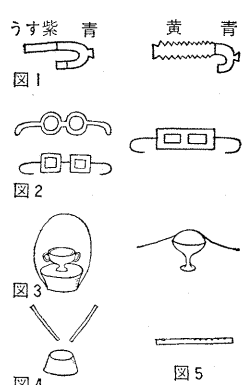
(4) おまわりさんごっこ

ままごとあそびから発展したもので、男の子が、この役をひきうける。

(5) 望遠鏡づくり

好きな色のラシヤ紙を丸めて、先に色セロファンをセロテープでとめたもの。絵をかいていた子どもが、つくりたいといい出し、教師が手伝つてつくつたものであるが、すぐに一人でつくるようになる。何枚もちがった色のセロファンを重ねてはつたものもできる。友だちの顔や外をみるのに使っている人もいたが、ほとんどが、つくる過程を楽しんでいた。長期間続き(三学期になつてもつくっていた)全員が一回は、つくる。

(6) 積木を使つての楽器あそび



二人の子どもの発案による。床上積木を拍子木のようにたたくカ

り「行進曲」などの曲に合わせてたたく。

(7) 風車づくり

五歳児からもらったかぎぐるまを見てつくといい、はじめは、ほとんど教師がつくりクレヨンやマジックで模様をかいていたが、そのうち、真似してつくる子どもが増えてきて、切ることもできるようになった。(三学期になってもつくる) つくることと、それでもってあそぶことの両方を楽しんでいたようである。

(8) 積木でつくった高速道路

小型積木を部屋いっぱい組み立てて、素晴らしい高速道路ができた。連絡汽車に床上積木を積んで、走らせたり、空箱でつくった自動車を走らせたりしていた。

(9) めがねづくり(図2)

色ラシヤで、ふちをつくり、色セロファンを裏からはり、めがねをつくる。望遠鏡から発展したものだ、ふちをモールにした

スタネット、小型積木の立方体を手でたたくドラム。「こいのぼり」

はじめは、べたべたセロテープでとめていたので、形はよくなかったが、だんだん、スマートな形になってきた。

(10) 旗づくり

隣の組でつくっていたものをみて、つくる。わりばしに、折り紙を切ってつけていたが、模様をかいたり、日の丸をかいたりするようになったが、あまり続かなかった。

(11) 自動車づくり

高速道路をつくっている時、つくりはじめたものである。石けんのあき箱、小さな空箱に牛乳のふたを細いひごやマッチの軸を通して車にしたもの。

(12) 時計づくり

牛乳のふたにモールをつけたもの。文字盤にマジックで色をぬる。すきな色のモールをえらぶのも楽しみの一つようだ。あそびながら、腕の時計をみて「今何時だ」といいながら楽しんでた。

(13) 首かざりをつくる。

オブジェテープをつなげて首かざりをつくる。

(14) 自由にハンドカスタを打つ

学校ごっこを椅子を並べてしていた時、「ハンドカスタをちょうだい」というので、出すとチューリップの歌をうたいながら、そこにいた数人のグループが、合わせて打ち始める。そのうち

に「ピアノをひいてよ」というので、好きな曲を次々にひき、ハンドカスターで遊ぶ。そこへひとりの男の子が、マジックを指揮棒にして、椅子の上に立って指揮をはじめ。指揮者が、三人にもなったが、皆が笑いながら、ひと時を楽しんだ。

(15) 優勝カップをつくる(図3)

アイスクリーム、プリン、パバロワのから容器とリボンでセロテープでつけて、優勝カップをつくる。首からかけたり、飾ったりして遊ぶ。

(16) 食堂車と切符づくり

椅子を使つての汽車あそびから発展したあそびで、オルガンの椅子を机にして、ままごと道具を運んでごちそうをつくり食堂車にする。片方では切符をつくって遊ぶ。並行して行なわれる。

(17) かたつむりをつくる

虫とりがさかんに行なわれていた時、かたつむりをつかまえ、室内でかっているのを毎日見ていた。アイスクリームのから容器を貝殻にして、モールをつけてつくる。

(18) 楽器をつくる

アイスクリーム容器とわりばしのたいこ(図4)とわりばしにマジックで穴をかいた笛(図5)。少人数で合奏する。

(19) お面づくり

画用紙に鬼や人の顔や山などをかいて切りぬき、かぶって遊

ぶ。リズムあそびに発展する。

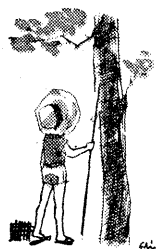
助言・誘導

その他にもいろいろな遊びや製作をしたがあまり個人的なものは省略した。以上のあそびの中で長く続いたあそびは、(1)汽車あそび(2)ブロックのピストル、(5)望遠鏡づくり、(7)風車づくり、(9)めがねづくり、(12)時計づくりであった。(12)の時計づくりは、ちょうど時の記念日の前に、子どもが、「時計をつくって」とい出したことから、子どもたちにどんなものにするかをきき、つくったものから発展し、子どもたちが、自分たちの好きな時計をつくりはじめた。できないところを、手伝った程度で、特別に指示を与えたり、教師側から働きかけたものはない。子どもたちだけで、遊ぶことができるようになり、安定して遊べるようになったことは、一つの大きな成長だと思ふ。幸いにも、大小とりまぜた空箱、わりばし、ストロー、あき容器、牛乳のふた、ハミリのからリールなどの豊富な材料を、父兄の方の協力で、いつも自由に使える状態にあったことが一つのきっかけとなり、十分に創造活動ができたことは、一学期の大きな成果であった。椅子や、ガラクタのような材料が、子どもたちの創意によって、さまざまな遊具に変わることは、非常に興味深いことであった。

子どもに見る

男女の性分化とテレビ

室 谷 幸 吉



小学校の一、二年生は、男女の性の分化Ⅱ区別のあいまいな中性期なのでであると従来は考えられてきた。多くの子どもたちは、こういう考えのもとに事実、扱われてきた。

子どもたちは満六歳の学齢期を待たず、個人差はあろうが、自分の体と異性の体とのちがいに気づき、大きな関心をもちはじめ

る。
男の子は自分の股の間に突出している器官体をはっきり意識し同じものを持っていない人間（女）もいることに気づく。そしてそれはなぜなのかを頭の回りの早い子どもらは考えはじめる。とにかく人間の中に見出されたこの差異を不思議だなあと思う。

しかし、子どもたちが、生殖器の存在、そのものの形態のちがいに気づいたということだけで、男は男らしく、女は女らしくな

るのか、といえば、決してそうではない。それは形態上のことだけであって、彼らの内面世界——心の領域・意識の世界——では男と女の性的な特異徴候は、それほどはっきりはしていない。

——やっぱり男の子は赤ちゃんのうちからちがうわねえ。泣き声もやんちゃ。声の出し方に張りがあわね。

——女の子は赤ちゃんのうちからちがうのね。しずかなこと。

というように、笑うこと、泣くこと、立ち歩きひとつにしても、嬰兒や幼児に、男と女のちがいが認められないわけではない。しかしこの頃にみられるちがいは、全く自然発生的なものではない。子ども自身の意識はだいたいにおいて加わってはいない。おとなが子どもらの上に見出して、やれ男らしいの、女らしいのと喜ん

でいる。そういう動作や表象は、実は、子どもの側からいえば「わたしは女である」「ぼくは男である」といった性の自意識の加わらない「おのずから表徴」「ひとりて表徴」であると考えていい。性差にもとづく意図をもたないこの時期の子どもたちは、無性期から中性期の生活体なのだと思えるのは、当を得たことである。

性器のちがいに気づいた、というだけでは、性へめざめた、とはいえないだろう。性へのめざめが、おぼろでアイマイで消極的であるというのが中性期の特徴である。子どもは一般に、七、八歳ごろまでは、性について積極的な姿勢をとるものではなく「意識がそれほど熟していないから」性衝動は睡眠中である、というのが、ごく普通のあり方であった。

ところが最近では、その事情が急速にかわってきた。かわってきたという徴候を、わたしたちの身近にいくつも、しかもたやすく指摘することができる。子どもたちは、無性期から中性期を、かけ足で通りすぎてしまう。従来、生まれてから六、七年かかって、いわばゆっくりとあせらずに中性期を経てきたのに、この頃の子どもは、四、五年で、ちょっと極端な言い方をすれば従来の半分、つまり三年ぐらいて中性期を離脱してしまう。性への関心や意識、それから実際のな性行為が二倍のスピードで形成されるようになった。こういう人間の内実の変性は、はたして喜ん

でいいことなのか、どうか。判断や評価は軽率にはできない。ともかく、子どもたちは、小学一年生にして、男であり男性である、また女であり、女性である、といったくなるのが現今の実情なのである。身体成熟、性成熟の加速現象をそうあらしめるのもその発端を、わたしは、ここにありありと見るのである。

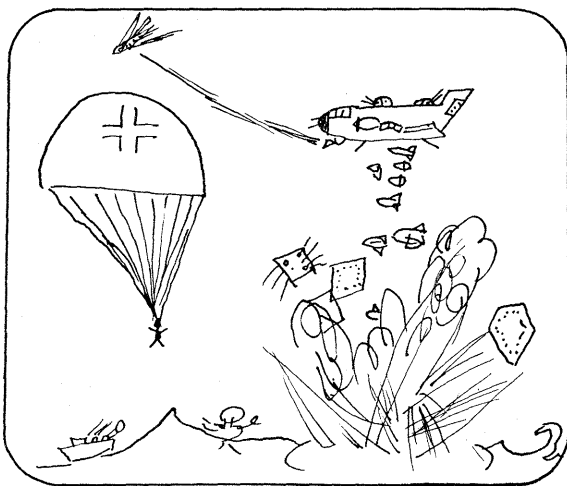
幼稚園児といえば、おおむね四〜五歳の子どもだ。いわばクチバシの黄色いと思われる子どもたちが、女の子のスカートまくりに興じたり、キスごっこだといって、右往左往もする。そして、——ワタチ、アイチテイルアア「わたし、愛しているわ」

——ケッコンチマチョ「結婚しましょう」
など、まだよく回らぬ舌のカタコトまじりで女の子と男の子がダキあったりする。身体的には、見かけどおりに幼いのに、行動的には全くイッチョマエの人間のような、アンバランスを感じさせられる。幼児たちのこうしたやり口に、体「形式」と心「内容・意識」のちぐはぐさ¹¹違和を感じて、あまり好ましいことではないなど、幾分ニガニガしく思うのはわたしだけのことだろうか。しかし、ともかくにも作りごとではない、事実として存在する現象なのである。

子ども社会では、五〜六歳になると、異性に対する関心が顕在化する。男の子は女の子に、女の子は男の仲間に、自分の好みに

合うスキナ相手を物色する。小さなボーイフレンド、ガールフレンドをさがし求める。

——○○ちゃんは△△ちゃんがスキなのよ。
——△△くんは○○ちゃんがスキなんだってさ。

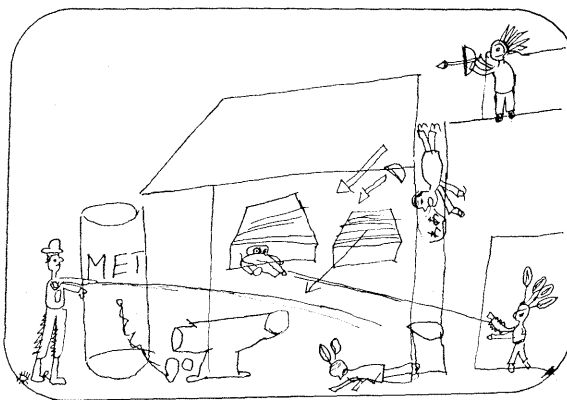


好きなシーン
「いいなあ、ばくげきめいれい(7歳・男)」

(男の子の大部分は戦争や西部劇などの闘争シーンに心をおどらせている。また見たいともいう。)

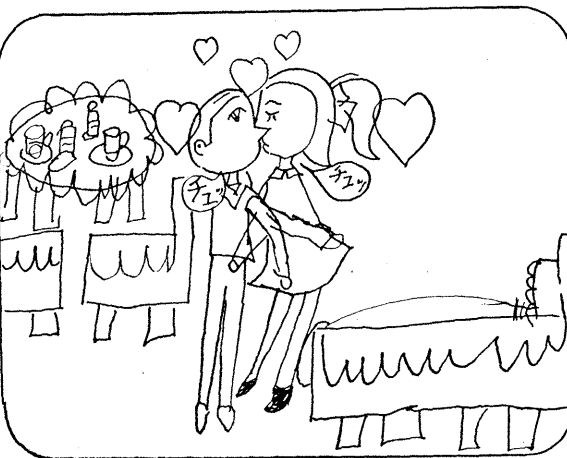
初恋の人となるのだろうか。子どもらの仲間社会での噂話やトモチ話など活発である。

このような幼児たちを、では私たちは、どう扱い、どう導いていったらいいであろうか。手をこまぬいて思案に落ちこんでいた



「西部劇でインディアンとたたかっている。インディアンの方がまけている。(7歳・男)」

「映画でキスしている。こんなシーンはいやです。(6歳・女)」
「子どもは放映されるアメリカ映画も、イヤ」とはいいいながらも、よく見えています。



り、反対に、ながめ回しておもしろ、おかしがっているだけでずむものでない。

こういう現象「現実」の、因つてきた根源をさぐり、子どもたちの変化の方向に沿って、望ましく、かつ健康な指導の方途を考え出しスケジュール化していかねばならない。

★

性へのめざめに向かって、幼児期から強い刺激・衝撃を与えているのは何か。わたしは、それはテレビだと思う。

もしテレビがなかったら、またもし、テレビがあっても、放送内容に、今日ほどに強い性的提示がなかったら、子どもたちはこのように、驚くほどの性的早熟にはならずすむであろう。

もちろん、子どもたちを性的の世界へいち早くかり立て、追いつみきずり込む働きをしているのは、テレビ一つだけではない……が。

子どもらの一日の平均視聴時間は約二時間半。土曜日とか休日には、八〜九時間も見ている子どももいる。当然、体を動かす遊びや運動はますます少なくなり、見たり、聞いたり生活時間が彼らの日々の大半を埋めてしまう。

毎日テレビに目をさらしている子どもたちに、では、あなたは

どんな場面が好きなのか。心にも目にも残っているのはどういうシーンなのかをきいてみた。

「ああいう場面をまたテレビで見たい」

「あれはカッコよかったな」

「ああいう画面がスキだよ」

そのような子どもの頭に、好感、快感を伴って印象を残している場面のいくつかをあげてみると――

男の子では、まずトップに、西部劇でインディアンと戦っているところ、西部劇でケンカをしている。ついで「巨人の星」で、星がボールを投げたところ。それから「爆撃命令」のような戦闘シーン。またゴジラとかガバラのような怪獣が登場するもの。女の子では、全くといていいほどスキな場面がちがう。先ずスポーツをしているカッコよさがあげられる。「アタックナンバーワン」で試合をしている。ボールを渡すなど。また「サインはV」でのバレーボールシーン、それから「デイズニールランド」のようなおとなしい娯楽もの。一〇一ぴきわんちゃんや「ドナルドダック」といった行き方のものである。

こうあげてきて、誰にもすぐ気づくことは男の子と女の子で、好みに画然とした、あるいは相対立するほどの区別があることだ。一言でひくくれば、男の子たちは戦闘的そして女の子たちはオママゴト的でお人形愛撫型。

このような意識や関心の傾き工合から見ても、男女の分化は幼児期にすでにあらわれている。幼児期にすでにあらわれたこのような偏りは、このまま彼らの生涯にわたってそれほど修正を加えられたり変化することなく、保ちつづけられるもののように思われる。

——見ていてイヤだなあと思う。

——あんな場面は見たくないや。

子どもたちが厭悪をいだいたり、忌避したりしたくなるような場面もテレビにはあるだろう。それはどういうシーンなのかをさぐってみると……男の子では、

▼飛行機がついらくした。▼鉄砲でやられている、けどそこへ助けにきた。「キーハンター」▼空中戦でアメリカが負けそうになっている。という工合に、闘争における「負け場面」に「クライ」が集中している。なるほど、争って勝つのは、だれしもカッコいいが、敗色濃いのは、これまただれしも歓迎はしない。

つぎに女の子が見たくないといっている情景は——ここで、男の子と女の子に、相反する嗜好傾向がうかがえる。男の子たちが「カッコいい」と垂涎おかない闘争シーンを、女の子たちの多数は、「イヤイヤ」といって否定したり、強い反発の姿勢を示す。

▼強盗をつかまえて、どんどん死刑にしようとしている。「ニュ

ース」▼ドラキュラが女の人をかみにいく。「ドラキュラ」

▼きちがい、三つの子の頭をけとばしている。「気ちがい映画」▼髪の長い女の人が、二人でけんかしている。といった調子である。

これは男の子と女の子の、志向性の差というべきだろう。男の子たちの攻撃的・積極的なのに対して、女の子たちは、大体において受動的・消極的である。闘争シーンを見る女の子たちの心理は、優勢な方に加担する立場をとらずに、いじめられ、いためつけられる負け方に自分の身を置くのであろう。闘争においては、受身的な立場にあるほどつまらなく切ないものはないはずである。

女の子どもらは概して静的なものを好み、急激で鋭角的な行動や変化は好まないのである。

▼赤オニボンボちゃんがうたをうたっている。あれはまったくくだらない。「ママとあそぼうピンボンパン」という声もある。

つぎに女の子たちでは、キス・シーンに対する反発・抵抗が、いまひとつ強く感じられる。

▼女の人と男の人がキスをしている。あれはみたくない。という声がかかりにある。これはどういうわけなのだろう。

好奇をそそられながらの反発——人間はアマノジャクなものでそういう同時矛盾的な気持ちでだれしも持っている。しかもその

傾向は女性に一般的に強い。心の底ではイヤでもないのに、口先だけは「イヤ」と反発する。そうした心理に因る婦結と考えられないだろうか。

子どもたちの、このような性への関心の高揚状態を見ても、性教育の早期からの必要が感じられる。一体性教育というものは、子どもの生誕した時点から、その子に対してこまかな配慮が望まれるのであるけれども、子どもが幼稚園または保育園に入る段階つまり子どもにとって、彼の属する特定な子ども社会がたちあられ、対人関係や行動範囲などが形式的にも広がる時期に達したら、その時はもう子どもに欠かし得ないものとして意図的な性教育が登場したものと知らねばならない。性に関する教育は、日本では、人間教育・学校教育の面でいちじるしく定着化の遅れた側面である。日本人一般に妙なはじらいが強く、なじめないのである。

ところが最近、性教育は降って湧いたように人々の関心をひきつつある。週刊誌によって派手に封切られる性情報の自由化・性的ショックをあてこむえげつないピラ等々、社会に瀰漫する性教育に意図的にタッチしはじめた。「昭45・2月中旬NHK」これがテキストの形で、学校教育に定置されるようになるには、今後数年を要するだろう。学校教育は、おおむね保守的なもので、よろずのことについてお先ッ走りを好まない。ある意味では非常に

腰が重く足ののろいものである。だからといって、テキストとして示されないから、「子どもたち、お前たちも、性への関心はしばらくおあずけにしておくがいい」は、理のとおらぬ話である。性指導が、教材として体系化され指導の方法が確保されるかどうかにはかわりなく、子どもたちの心も体も、日に日に成長し変化の歩みを止めはしない。「テキスト化待ち」などと悠長なことをいっていないで、性教育に対する姿勢、態度を決めることを、世の教育者たちは、時代から、社会から要請されているのである。

テレビションを通して見た現代の子どもたちの心の動向を以上に見てきた。わたしたちはこの中から、いろいろな示唆的なものを読みとることができる。

子どもたちの心というものは、時代なり社会なりを反映しながら、それ自体ひとつの潮流となつて、ゆっくり移り動く生き物だと見ることがができる。子どもの教育に当面する人たちは、そういう子どもたちの心の動向なり潮流なりに、いつも鋭い関心の目を向ける必要がある。そして把握した子どもたちの実体の上には、堅実な養育計画を策定しつつづけていかねばならない。

(明星学園)

ハンガリーの保育園の〈教材うた〉

加勢 るり子

一貫した音楽教育は、ハンガリーでは保育園からはじまります。すべての音楽の基礎づけは、幼時期にこそ、適切な方法で与えられなければならない、として、子どもにもっともかなった、伝承的なわらべうたを動作（あそび）とともにうたうことから音楽活動に入っていくのです。

わらべうたは、どこの国のものにも、だいたい2/4拍子で二小節のモチーフ構成があり、ことばや遊びの型にメロディーがかなり自由に従っているという、共通のパターンがみられます。そして、モチーフのくり返しや、類似のモチーフの集まりでできていたり、また、二小節がその基本的単位になっていたりするなど、種々の似たような要素がみられます。

このような、一般的世界的な子どもの歌のもっている基

本的な性格を

生かした現代

の〈子ども

うた〉もま

た、ハンガリ

アの保育園で

の大切な教材うたです。この種のAうたVの代表的な

ものにコダーイが八十歳のときに作曲したへ小さい人たちの

歌〉があり、これは五十曲から成っています。この本の

最初では、コダーイはわずか二音しか使いません。つぎに

三音、四音、そして最後が五音となります。音の長さにつ

いては、わずかに一拍、半拍、二拍のみを使用しています。

このような素材の範囲内で、コダーイは魅力ある多様な効



ブタベスト第6音楽保育園にて



(写真一九六五年
コダーイと筆者)

果をあげた歌の宝庫を作っています。これらはすべて無伴奏でうたうことになっており、歌詞の自然なアクセントにつれて音楽の強弱がこれに従うたてまえになっています。半音音程は、子どもたちが清潔な音程で、支柱になる五音（自国の音楽語源であるもの）をしっかりとうたえるようになってから入れる方が安定しやすい、というコダーイの考えにより、この本では使用されていません。

歌詞は、児童語によらず、本当に子どもことばで語ることを知っている優れた詩人のものによっています。わらべうたや子どものうたが、いずれにせよ、つぎのようなコダーイの理想への共鳴をもった先生たちにより、ハンガリーの保育園の中で、子どもたちとともにうたわれていることにまちはありません。

それは、音楽活動の中でも特に、みんながいっしょにうたうことの中に、人間の理解と同情への一つの秘密が存するのだということとを、子どもが子どもなりにわかるようにしたい、というものです。

コダーイ：あそびと教材うた
 <幼児音楽教育>の講演と実技

と き……………7月27日、28日（月・火）A.M.8.30

と ころ……………お茶の水女子大学 講堂
 （国電大塚駅下車）

プログラム

★	こどもとうた	前東大脳研究所長	時	実利彦
★	幼児の才能開発	京都大学院教授	時	牛島義友
★	幼児の発達にもとづいた教育	青愛山育研究所	時	津守真
★	コダーイ・システムとその生かしかた	お茶の水女子大学助教授	時	加勢るり子
★	実 技	お茶の水女子大学講師 コダーイ・システム研究会長	時	

主 催……………コダーイ・システム研究会
 渋谷区本町6-2-4 TEL377-0740

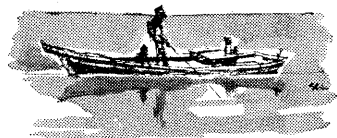
後 援……………お茶の水女子大学児童研究会
 テキスト……………「小さい人たちのうた」「世界の子供のうた」「ピアノの学校」

会 費……………1人、1,000円（当日受付にて）

マリア・モンテツソリの町

グリフォオーネをたずねて

西 本 美 節



ヨーロッパにおける幼児教育の近況を調査研究するため、わたしたち一行が最終目的地であるイタリアのベルジアに着いたのは、一月二日夜の十時半をまわっていた。水の都ベネチア（ベニス）をあとにフィレンツェ（フロレンス）からトレントーラ、

ベルジアへと、汽車を乗り継いだ。午後四時にはほとんど日が暮れ、朝は九時ごろにならないれば夜が明けず、昼間はきわめて短く、陽光はほとんどおがめない。町並みはネオン一つなく、静かな澄みきった空気に包まれている。バスを待つ間、駅の構内にはいる。中央に、キリスト降誕のそぼくなパノラマが飾っており、一メートル四方の小規模なものであるが、それでもあたり一帯に、はなやかな色どりを添えている。照明としては、自然色の電球の光を当てているにすぎない。そぼくな暖かみというものであろうか。やがてバスで小高い丘の中腹にあるグリフォオーネ・ホテ

ルに着いた。この町でいちばんりっぱなホテルだが、日本にみられるような豪華な感じではなく、こぢんまりした、落ち着きと安らぎを感じさせるものであった。じゅうたんや屋内の装飾がベージュを中心とした中間色を多く取り入れているためだろう。

翌朝九時、一行はバスでモンテツソリ「子どもの家」（児童館）を訪問した。中世の建物を思わせる二階建ての土色をした家の前で、バスが止まる。れんが造りの家が眼下に見える丘の頂上近くである。門もなければ、学校や幼稚園らしいものは、なに一つ見えない。狭い窓わくのあざやかな緑色が、少々ちぐはぐな感じをいだかせる。

二階の窓下には、植木鉢が並び、かれんな無名の赤い花が咲き、シートや下着が干されている。その横手の下に、大きなドアが両開きになっている。ここからはいるのだと聞かされて、もう

一度見直したが、普通の家と全然区別がつかない。いぶかりながらドアを開くと、白地に青い縦じまのシャツを着た用務員らしき男が、にこやかに次のガラス戸を内側からあけて、待ち受けていた。晴れ晴れしい明るさは期待できないが、それにもまして清らかな美しさに心を打たれる。

幅二メートル余りの中廊下には、保育室が二つ並び、へやごとに、クリーム色・青色と色分けされている。天井は少し高いが、中間色の優美な壁画が一面に描かれ、思わずうっとり見とれた。廊下の突きあたりのドアをあけると、右手に祭壇とおぼしいたながあり、その下には、子どもたちがひざまずき祈りをささげるための長いクッションが、低い二段の階段の上に敷かれている。

次のへやはホールになっていて、床には赤・黄・青三色のラインが、だ円形に数本書かれている。おそらくすべての子どもがこのラインによって、生活のルールを学ぶ端緒を開いたことだろう。モンテッソリ教具の第一である。ここでわたしは、モンテッソリ教具の一つである音感ベルを手に取り、モンテッソリの教えを受け、現在この学校で子どもや学生の教育にあたっておられるパオリニ女史から、じかにその取扱法を学ぶことができた。

次のへやは、子どものロッカールームだろうか。白地に小柄な花模様のカーテンの中には、小ぎれいにせんたくしアイロンがけ

した仕事着が、ハンガーに掛け並べられている。それぞれが思いのこや柄で、どれも子どもを引き立てるような個性的なものだが、小さな小模様の花柄のものが多い。あいにく流感がはやっていたため休みになり、子どもの活動や保育の実態が見学できなかったのが心残りであった。パオリニ女史もたいへん残念がっておられたようだ。

へやの片すみに、子ども用の五十センチメートル四方のブリキ張りの洗たく台があり、せっけんも見える。その向かいには、十センチくらいのアイロンを置く、三十センチ四方くらいのブリキ張りのアイロン台がある。その横手の戸だなの中には、きちんとたたんだハンカチや、まっ白なエプロンが整理してある。廊下には化粧台が用意してあり、時おり子どもたちがここで髪をとき、服装を整えるのだという。保育室のすみには、子ども用のほうきやちり取りなど、そうじ用具が掛けてある。洗たく台にしろアイロン台にしろ、すべて子どもの体格にうまく合わせて準備され、白木の美しさをそこなわぬように色どられている。

机の上は、へやによりピンク・青・クリーム色と色分けしてあるが、足の部分はベージュ系統の色で統一されている。しかも、いすや机は、ひとりひとりのからだに合わせてあり、ひとりで簡単に移動できるように軽い木材を使用している。机の置き方は、ひとりあり、ふたり向かい合わせあり、十人余りが皆同じ方向に

二列に並んでいたりと、さまざまである。保育室全体の三分の一ほどをブロックで仕切り、観葉植物を植えてある。窓にはレースのカーテンが掛けてあり、植木鉢がひとつふたつ置かれている。レースのカーテンと植木鉢は、ヨーロッパバビュウどこへ行っても、よく見かける。

いちばん奥のビントクのへやの中二階は、観察室になっている。周囲の壁に沿って幅一メートルほどの回廊になっており、ここから階下の保育室のようすが見渡せるしくみである。回廊の内側には、高さ一メートルほどのコンクリートの腰壁があるため、一階の保育室から見上げても、二階の回廊から観察している人に気づかないようである。

一階の保育室には、まわりの壁に沿ってモンテッソリ教具を並べてあり、中央には個人用の机やイスが思い思いの向きで置かれている。児童画も所々に展示されているが、日本のように、画びょうでとめたりはせず、教師の手作りの厚紙製の額縁の中に入れて飾られている。また、その額縁は、中の絵とうまく調和する色のものが選ばれている。絵は、一般に日本の子どもものものより少し線が細いようだが、一面に夢のような淡い色を用いている。子どもたちの気に入った絵を、話し合いで選び飾ってみせるらしく、どの子の絵も差し替えによって必ず展示されるようになっていくが、日本の幼稚園の保育室のように、気に入っても入らな

くても、いっせいに満艦飾のようにはりつけるようなことはしない。ここにも、個々の子どもの人格を認めているようすがうかがえるように思う。

南側のテラスは一メートル半ほど出ており、コンクリートでゆったりとしている。木製のブランコと円形階段が置かれており、それも素材をうまく生かしている。園庭はほんの内庭程度の狭いものだが、れんがで仕切られた花壇は手入れが行き届いている。階下は幼稚園で、二階は小学校である。小学校にも個人別の机とイスがあり、机の片すみに思い思いのカードや紙人形がセロハンテープで張りつけてある。算数や地理・歴史などの教材が、子どもの年齢にふさわしく、理解しやすいように置かれている。

窓から中庭を見ると、隣や裏の家の物干しが目と鼻の間にある。しかし、その物干しの片すみに、小さな古いキリスト降誕の人形がごちんまりと飾られているのは、やはりクリスマス・シーズンならではの光景であろう。最高学年のへやになると、机とイスが全部黒板のほうに向いているが、おとな並みの大きさである。色は白木のままで、形はかまぼこ形をしていて、思わずずわってみたい気持ちに誘われる。壁には、世界各地のペンフレンドからきた便りが、世界地図の下にはられており、印象的であった。幼稚園と小学校の一貫教育は、このような小規模なものでなければ、とてもむりだと今さらのように感じた。

この建物は、もともと修道院だったものを、イタリアの教育関係者が一九五〇年にモンテッソリのために、教育の場と定めたものという。修道院の個室だった二階が、今は小学校に当てられている。したがって、バオーリーニ女史は、講演の中でも施設見学中でも、絶えずこのことを気にかけて、これははじめから子どものためを考へて建てられたものではないと強調しておられたのである。

ゼミナールにおいて、バオーリーニ女史は、モンテッソリが、人間形成は幼児期に端を発することから、この地で四十人の幼児とともに教育を始めたことや、現在、アメリカのハーバード、シカゴ、ワシントンなどの大学で提唱されている「幼児教育は生まれ落ちたときから始まる」ということを、既に五十年前から実践していることを力説された。女史の講演の要旨を述べると、次のとおりである。

マリア・モンテッソリ (Maria Montessori, 1870~1952) はイタリア最初の女医であり、その研究テーマは精神薄弱児の教育であった。彼女は、この教育方法を正常児に適用すれば、より良い教育ができるのではないかと考え、この仕事に着手した。イギリスなどで精神薄弱児の研究を十年間行ない、その後その方法を正常児にあてはめ、確信を得た。彼女のそのころの対象児は、生活水準の低い両親に育てられた子どもだったが、子どものほんとう

の姿は、育てる両親と関係がなく、子ども自身の中に偉大な力を見つけ出すことの重要性を悟った。教えこむのではなく、子どもの魂が自己を表現したものの、すなわち『子どもの発見』について、教育者はそれをじゃましたり、特に訓練したりせず、その自然の発達を助ける役割をもっている。

さらに、子ども自身の姿、すなわち自然法ともいべき姿の発達を関することにあり、これは国籍や民族に関係なく、生まれたての赤ん坊の持つ豊かな力が、既にそれである。生後二年間は、生涯にとって最大の影響を与え、強大な吸収力をもつ。この時期の子どもは、助力と尊敬を受ける存在でなければならぬし、これは両親の責任でもある。三歳になれば、多くの手助けを必要とする状態で『子どもの家』にはいる。ここで、この年齢の幼児の特色である『敏感期』についてじゅうぶん考える必要がある。

1 吸収する頭脳

幼児は、言葉のみならず、すべての文化を吸収し、幼児なりに小さな文化の中で、完全に子どもとして生活している。この敏感な感覚ですべてを受け入れるのは、一時的な現象で、やがて消失する。しかし、このすばらしい感覚で受け止めた人格はその子の生涯を支配するだろう。この時期の幼児が、容易にすべてをわがものとして受け入れるのは、幼児がおとなよりも早く外国語をマスターするのと同じだといえる。

2 子どもの働き——

このような子どもに必要なことは、最も助力を必要とする時期に、力をかしてやることだ。落ち着いた環境を整えることが大事だ。子どもの働きは、それによって自分自身を構成すること、人格形成をすることだ。

この働く時期に行なわれる子どもの完成を助けるために、教師がなすべきことは、次の二点である。

イ 子どもの心身の発達を細かく観察すること。

ロ まわりのおとなの姿勢に気を配ること。

子どもを理解し、伸ばすことであり、謙虚な態度で、偉大な力限らない未来を持っている子どもの前に立つにふさわしいおとなであることだ。最適の方法を見出すための観察が必要であり、環境を整えることが重要だが、その環境は子どもの発達に即していなければならない。観察によりつかんだ個々の子どもの発達のリズムにしたがって、子どもの内部より現われる要求を、子どもとともに発展させていくことがたいせつだ。

3 習う子ども——

子どもは生来習うことを好むものだ。子どもの直感的要求は「知りたい」ということであり、食欲が人体を養うのと同じである。もしも事象に無関心な子どもがいるというならば、その子になにかの障害により、その要求がこわされているのだ。「知る」

ということにより、精神は養われる。子どもは精神的に飢えた状態にあり、おとなはその子に必要な滋養物を与えねばならない。そのためには、環境を整理することが必要だ。

4 環境の整備——

色は明るさを必要とし、子どもが自分で持ち運びしやすい材質を選ぶ。いすは個々の子どもの体格にあい、よごれがすぐわかるようにしておく。さらに、子どもが自宅にいるような気持ちでいられるよう配慮をしている。教具の使用法ばかりでなく、その後にあるものについても教える。すなわち、精神の平衡を保つことの重要性についてである。

モンテッソリの教育は、教育方法のための教育ではなく、その真の目的は、あくまでも子どもが持つ無限の力(可能性)・感性を養い、子ども自身の働きを重んじ、習うことを喜ぶ子ども心を満足させることで、この目的を達するための手段として教具を用いるのだ。したがって、目的と手段とを転倒しないようにしなければならない。「清らかな水があふれ出て、かわいた土を湿らせていくように……」これが教育の真髄である。

現在、ここで教育している子どもは、幼稚園だけで三二〇名・八組である。一組には、教師一名・補助教師一名・職員一名・実習生二名が配置され、毎日くわしく観察記録をとり、討議し、ひ

とりひとりの子どもがかたよらない、よい教育法を立案実践している。さらに、母親とは絶えず密接な連絡を保ち、特に家庭教育のパンフレットなどは準備しないが、母親との個人面接により、子どもの教育と協力について話し合っている。わが国のように、いっせいに集まる母親教室や、父母会・保護者会というようなものでなく、個人懇談により個別指導を行ない、家庭教育と幼稚園教育の一貫性をはかっている。子どもが好ましくない行動をするのは、おとなが子どもの要求をよく理解していない場合だと考え、母親との協力により成果を収めている。したがって入園当初にみられる生活のリズムの乱れや、しつと心や不安からくる好ましくない行動も、やがて消失し、持っている能力をじゅうぶん発揮することができる。

ゼミナールを終え、十三世紀に建てられたという市庁で開かれた市長の歓迎パーティーに招待され、医師であり教育者である市長が、わたしたちひとりひとりにねんごろな握手をされ、幼児教育を通じて世界平和のために手を携えることのないことを親しみと愛情をこめて示されたことは印象的であった。その場には、モンテッソリ協会の会長も同席され、ことしはモンテッソリ生誕百年祭が催される年に当たっており、この年の初めに日伊の幼児教育者の交歓が行なわれたことは意義深いと、心から喜ば

れた。さらに、イタリア語さえ習得すればだれでも、ここでモンテッソリ教育について研究する機会を得られるし、そのような篤学の士を歓迎することであった。

平静な町並み、整然とした石畳を見るにつけ、モンテッソリ教育の場にふさわしいこの町が、また、モンテッソリによってもっているという感じさえした。終わりに、わたしたちのために帰国を延ばし、通訳の労をとってくださいだった松本尚子女史のご厚意に對し深く感謝したい。

(大阪基督教短期大学)

変更のお知らせ

これまで毎年六月にお茶の水女子大学附属幼稚園で開いてきました「幼児教育実践指導研究会」は、当大学附属校園の話し合いの結果、当分休むことになりました。

従って秋には行なわないことになりました。

五月十日

お茶の水女子大学 文教育学部
附属幼稚園内 幼児教育研究会

一点の嚴肅味

子供は遊ぶ。我等は子供と共に遊ぶ。しかしおとなの遊びに子供を使つてはならない。

子供は自由だ。我等は子供に自由を与えてやりたい。しかし、子供にいかなる生活をさせるかにはおのずから限度がある。みだるべからざる規矩がある。子供は自由だが、子供の相手をするものには、守るべきところがなくてはならぬ。

子供の相手に消極は禁物だ。神経質の苦勞性のあふながりでは、思い切った子供の相手は出来るものではない。全般的態度として、積極と、大胆と、ある長閑のどかさとは、子供を大きく育てる上に極めて必要のことだ。しかし、積極と冒険と粗慢と、長閑と余裕とは、似てしかして違う。子供の相手という大にして微、微にして大なることにおいて、殊に、似てしかしてはなはだしく違う。子供の相手に欠くことの出来ないものは積極、大胆、長閑さと共に、細心と、深慮と、慎重とだ。

子供といっしょに笑いなばらぬ。笑ひながら、おどけながらも、自分みずから戒め慎しみてみだるべからぬ。いらない一点の嚴肅味、そののないものには子供は託せられない。

——倉橋惣三選集第二卷（フレイベル館）より

幼児の教育 第六十九卷 第七号

七月号 © 定価八〇円

昭和四十五年六月二十五日 印刷
昭和四十五年七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレイベル館

振替口座 東京 一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレイベル館 にお願いたします

現代幼児教育研究会

ことしの全国大会は 太陽と神話と伝説の国 宮崎で!!



(宮崎・日南海岸)

会場■宮崎市民会館 宿泊■青島温泉

日時■8月1日(土)・2日(日)・3日(月)

内容■全体講座・分科会・記念講演・レクリエーション等

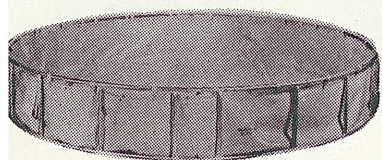
講師■レギュラー講師全員と、特別ゲスト

会費■700円(資料代ほか) ほかに宿泊費等実費

主催 **フレール館**

*くわしくは弊社代理店・支社・支店・出張所にお問い合わせください。

夏に園児の体力つくりを!!



キンダープール(A)

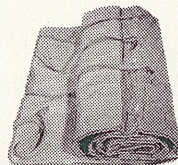
キンダープール(A)

組み立て式。枠は鉄製・本体は特殊ビニール製。直径280cm 高さ45cm・400cm²のビニールカバーと整理袋つき。黄色。

38,000円



魚つりセット



キンダーロールマット



キンダースプリングラー

魚つりセット

プラスチックのきれいな魚が、白、赤、黄、緑、青の5色あり各3尾計15尾と竹竿が5本で1セットです。1,200円

キンダースプリングラー

水道につなぐだけで勢いよく円型に回転し撒水します。高さは30cm～130cmまで5段に変化します。鉄製 2,800円

キンダーロールマット

水にぬれても平気な特殊ビニール製で軽く、持ち運びが便利なビニールの袋もついています。レザータッチ。

(A)長さ160cm、幅90cm、厚さ0.5cm 2,500円

(B)長さ320cm、幅90cm、厚さ0.5cm 4,700円